

広 諏 訪 原 遺 跡

町民テニスコート新設工事及び農村総合整備事業
農道7号工事に伴う埋蔵文化財調査報告書

2004年

熊本県鹿本郡鹿央町教育委員会

広 諏 訪 原 遺 跡

町民テニスコート新設工事及び農村総合整備事業
農道7号工事に伴う埋蔵文化財調査報告書

序 文

鹿央町は熊本県の北東、菊池川の中流域に位置し、広々とした畑作地帯がひらけた自然の幸に恵まれたところです。また先史、古代の遺跡が多数存在する文化財の豊かな地でもあります。とくに町の北部に位置する国指定史跡の岩原古墳群には築造当時の姿をほぼ完全に残し、優美な姿を誇る双子塚古墳があります。現在、岩原古墳群は菊池川流域（山鹿市・菊水町・菊鹿町・鹿央町）に設置された県立の歴史公園である「肥後古代の森（鹿央地区）」の指定を受け、平成4年度には県立装飾古墳館が開館し毎年多くの人々が来館されています。岩原古墳群をはじめとする多数の遺跡は古来よりこの地に人々が暮らしてきた痕跡であり私達の祖先の姿を現在に語りかけてくれています。

鹿央町教育委員会では平成15年度に実施した町民テニスコート新設工事及び農村総合整備事業農道7号工事に伴い広諏訪原遺跡の発掘調査を行いました。本遺跡からは5基の石棺を検出し、貴重な副葬品も多数出土しました。本書はその調査の成果を記した発掘調査報告書です。本書が地域の文化財に対する理解と認識を深める一助となり、学術資料としてばかりでなく、学校教育や生涯学習の場で幅広く御利用いただければ幸いです。

最後になりましたが、発掘調査に際して多大な御協力をいただいた熊本県教育委員会文化課、熊本県立装飾古墳館、山鹿市立博物館ならびに発掘作業、整理作業に従事していただいた関係各位に心から厚くお礼を申し上げます。

鹿央町教育委員会

教育長 佐 伯 穎 二

例 言

1. 本報告書は、熊本県鹿本郡鹿央町大字広に所在する広諏訪原遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は町民テニスコート新設工事及び農村総合整備事業農道7号工事に伴い鹿央町教育委員会が実施した。
3. 発掘調査は平成16年1月21日から平成16年3月31日まで実施した。
4. 発掘調査は鹿央町教育委員会が実施し、遺構実測、写真撮影は土野雄貴・村田勉が行った。
5. 本書作成に伴う出土遺物実測・製図は村田が行った。
6. 本書に掲載した遺構実測測量図、遺構実測図の縮尺は下に表示を行った。
7. 本書で用いたレベルは海拔絶対高である。
8. 出土人骨の取り上げ及び鑑定は土井ヶ浜人類学ミュージアム館長松下孝幸氏に依頼した。
9. 遺物写真は熊本県立装飾古墳館から借用した。
10. 赤色顔料分析は株式会社パレオ・ラボに委託した。
11. 本書の編集・執筆は村田が担当した。
12. 本報告書に記載した出土遺物、図面等全ての記録資料は、鹿央町教育委員会に保管されている。

目 次

1. はじめに	
調査の経緯	1
調査の組織	1
2. 位置と環境	
遺跡の位置	2
周辺の遺跡	3
3. 調査の経過	
調査の経過	9
4. 調査の成果	
(1) I区	
1号石棺	10
2号石棺	14
1号土壙	17
溝	18
(2) II区	
3号石棺	21
4号石棺	23
5号石棺	23
5. まとめ	26
付 編	
熊本県鹿央町広諏訪原遺跡出土の古墳人骨	27
広諏訪原遺跡赤色顔料蛍光X線分析	35

插图目次

第1図 遺跡位置図	2
第2図 周辺遺跡分布図	6
第3図 周辺遺跡出土石棺	7
第4図 周辺遺跡出土方形周溝墓	8
第5図 I区遺構配置図	10
第6図 1号石棺検出状況平面図	11
第7図 1号石棺断面セクション図	12
第8図 1号石棺出土遺物実測図	13
第9図 2号石棺断面セクション図	15
第10図 2号石棺実測図	16
第11図 2号石棺出土遺物	17
第12図 1号土壙出土遺物	17

第13図 1号土壙実測図.....18

第14図 1～3号・6号溝実測図.....19

第15図 4号・5号溝実測図.....20

第16図 II区遺構配置図.....21

第17図 3号石棺実測図.....22

第18図 3号石棺出土遺物実測図.....23

第19図 5号石棺出土遺物実測図.....23

第20図 4号石棺実測図.....24

第21図 5号石棺実測図.....25

図版目次

図版 141

図版 242

図版 343

図版 444

図版 545

図版 646

図版 747

図版 848

図版 949

図版10.....50

図版11.....51

1. はじめに

調査の経緯

広諏訪原遺跡調査は町民テニスコート新設工事及び農道7号工事に伴う緊急発掘調査として開始された。町民テニスコート新設工事は、町営住宅建設（平成14年度～平成17年度）に伴い移設する必要が生じたテニスコートを新たに整備し、隣接する公民館（町民体育館）と一体的に管理運営を行うことを目的とした工事である。また、農道7号工事は農村総合整備事業の一環として、農作物運搬時の荷傷み防止・農耕車両通行の円滑化を目的とし、圃場整備地区外周道路を利用した改良舗装工事である。両工事において、重機による掘削中に石棺を発見したとの報告を受けた鹿央町教育委員会は新規の遺跡として登録を行い、熊本県教育委員会文化課との現地協議後、緊急発掘調査を実施することを決定した。調査区は大字広字諏訪原に位置するため遺跡名を広諏訪原遺跡とした。更に、町民テニスコート新設工事現場をⅠ区、農道7号工事現場をⅡ区として調査を行った。

調査の組織

調査主体 鹿央町教育委員会

調査責任者 鹿央町教育委員会

教育長 東 正 治

調査事務体制 鹿央町教育委員会

局 長 井 出 昌 人

係 長 森 宏 一

社会教育指導員 村 田 勉

嘱 託 士 野 雄 貴

調査指導・助言

熊本県教育委員会文化課 西 住 欣一郎

熊本県立装飾古墳館 副館長 江 本 直

学芸課長 木 崎 康 弘

山鹿市立博物館 館 長 隈 昭 志

首席研究員 中 村 幸史郎

調査作業員 江藤恵美子 木村天授子 五嶋竜也 城 博子 山下公子 和田賢一

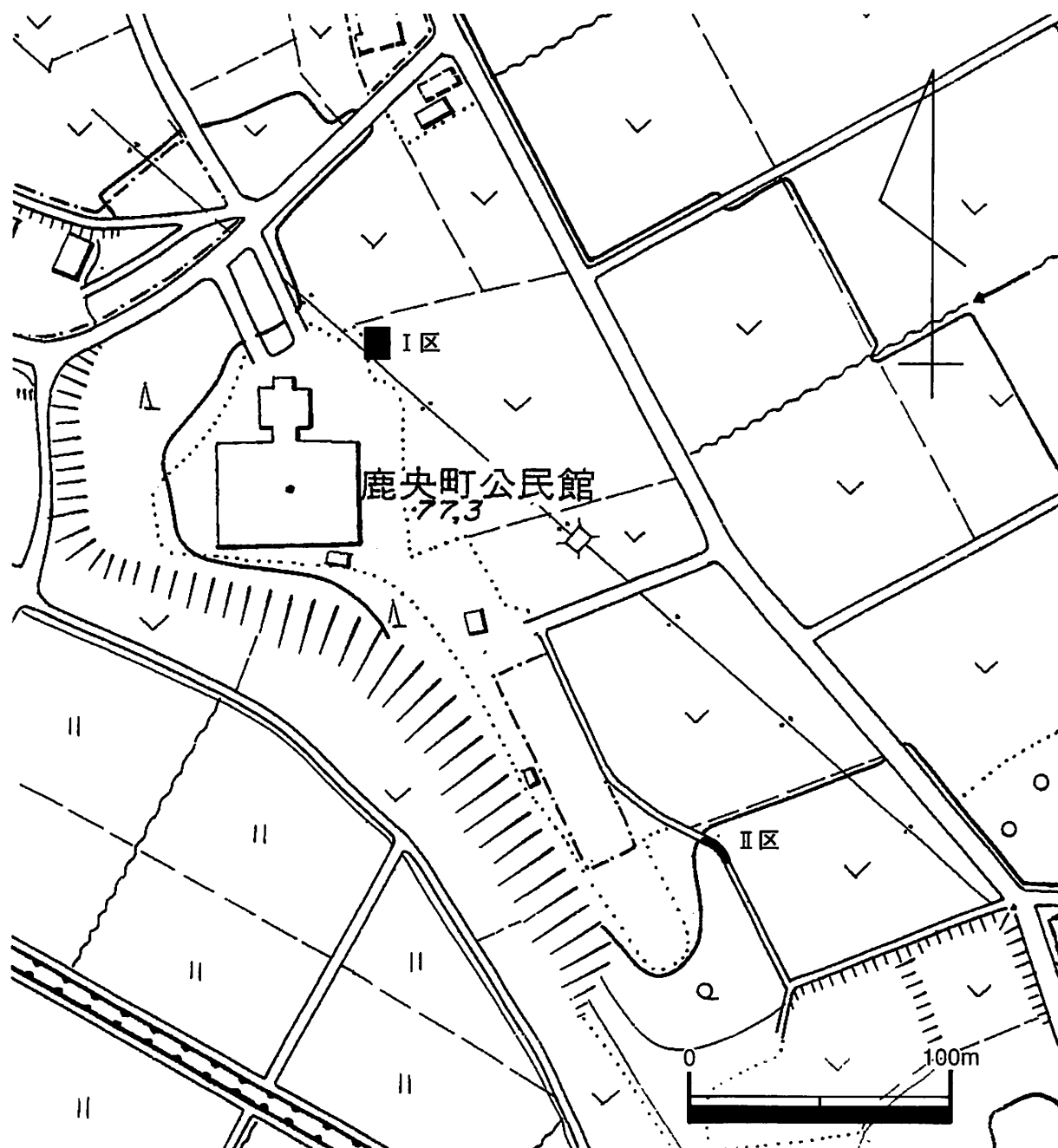
整理作業員 江藤恵美子 木村天授子 山下公子

2. 位置と環境

遺跡の位置

鹿央町は熊本県の西北部に位置し、菊池川の中流域地帯にあたる。菊池川は阿蘇外輪山を源流として熊本県北部を流れる一級河川である。そして町の中央部には岩原川、東部に千田川、南部に江田川といった支流が流れている。これらの小河川は町の中央部に広がる台地を浸食し小規模な谷をいくつも形成している。西部には標高311.8mの米野山がありその周囲には米野低山地が広がっている。

広諏訪原遺跡は町中央部に舌状に伸びる台地の西側に位置する。標高は約77.1mである。西側は小河川の侵食によって谷となり、遺跡との比高差は約20m以上となっている。



第1図 遺跡位置図 (S = 1/2500)

周辺の遺跡

今回調査した広諏訪原遺跡の位置する台地周辺での石棺または方形周溝墓の調査例は9件ある。以下に記す遺跡、石棺について詳しくは『鹿央町史』に掲載されている。

①久保原石棺

山鹿隈府盆地の南縁を限る台地の北端、標高50mに位置する。昭和32年3月12日、地元農家が農作業中に石棺を発見し、連絡を受けた山鹿高校考古学部によって調査された。地元の古老の話では塚があった記憶がないという。地表下50cmに石棺が位置する。石棺は箱式石棺である。石材は凝灰岩である。棺身上縁部の5cm～10cmが粘土で被覆してある。粘土の中には赤色顔料が点々とみられる。蓋は大小5枚の板石である。棺身は板石4枚を組み合わせ、屍床面にも板石を敷いてある。板石の削平は粗く、厚み、長さ、幅は不揃いで、接合部の削り込みや棺蓋、棺身共に組み合わせが不揃いである。底石は屍床面の広さに足らず、粘土で不足分を補っている。

屍床面には赤色顔料の混じった土が約10cm堆積し、その中に骨片と歯がある。被葬者は性別不明の熟年であり、頭位方向は東である。副葬品は鉈1点、刀子1点、鉄製鍬先1点、珠文鏡1点、鉄刀1点である。鉈は、刀子状で長さ11.3cm、茎幅9mm、刃部の最大幅13mmと小型である。刀子は、長さ12.8cmである。鉄製鍬先は、長さ約3.8cm、幅約8.2cmである。珠文鏡は、被葬者の頭部右側、側壁に接して鏡面を上にしてあった。面径6.2cmである。珠文帯は2条ある。鏡の厚さは2mm～3.5mmである。鏡縁端では面心より2mmほど鏡背に反っている。鏡背約3分の1には緑繻があり、布地が付着している。布地の材質は不明だが、平織りである。鉄刀は、被葬者の左側に刃部を外側に向け、茎を頭側においてある。全長71.5cmで刃部57.6cm、茎部13.9cmである。刃部はわずかに内反る。目釘穴が2ヶ所ある。

②郷原石棺

昭和51年農場整備事業の際発見され、鹿本高校考古学クラブによって調査された。その結果3基の箱式石棺が出土した。1号石棺と2号石棺は同じ形式であり、石材は変成岩である。内径は長さ190cm、幅40cm、高さ30cmである。屍床面には粘土が敷かれ赤色顔料が散布してある。それぞれの石棺に2体ずつ埋葬してあった。副葬品はない。石棺は全面に赤色顔料が塗られ、棺蓋も棺身も粘土で目張りしてある。3号石棺の石材は凝灰岩である。工事のために約半分が破壊されていた。幅35cm、長さ1.7m、高さ23cmである。屍床面には粘土を約6cm敷き、赤色顔料が散布してある。交互に寝かした2体の人骨が埋葬してある。副葬品はない。

③持松石棺群

昭和34年5月、持松公民館の地下げ中に石棺が発見された。山鹿高校考古学部が調査し、3基の石棺が確認された。

第1号石棺は家形石棺である。棺材は凝灰岩である。長軸方向は北56度東である。棺身上縁から約20cm下は地山の赤褐土を叩き固めてあり、その上に凝灰岩の破片が約2cmの厚さに敷き並べてある。棺蓋は破碎され、長さ88cmが残存していた。屋根形で上面に幅10cmの棟、長辺の左右に幅7cmの軒がある。両小口面には縄掛突起があったと考えられるが一個は欠失している。棺身は、削平された6枚の板石を箱式に組み合わせてある。屍床面は、地山上に赤色顔料混じりの細砂が敷いてある。屍床面上から頭骨と歯4点を確認した。副葬品は鉄鍬6点、鉄剣破片1点、刀子1点、鋸2点、不明鉄片2点である。古い時期に攪乱を受け、棺蓋の東半分は失われていたので遺物の原位置は不明である。

第2号石棺は家形石棺である。棺蓋は、棟が広く幅15cmある。長辺の両側には第1号石棺のような軒の造り出しはない。両小口面に縄掛突起があり、付け根が棟より9cmほど下がっている。棺身は、

削平された6枚の板石を箱式に組み合わせてある。板石の厚みは不揃いである。屍床面は第1号石棺と同様である。

第3号石棺は家形石棺である。戦時中、防空壕を掘る時に発見し、側石に穴を開けて出入りしてある。長軸方向は北72度東である。棺身は削平された板石を箱式に組み合わせている。屍床面は北側187cm、南側182cm、棺内の深さ64cmである。屍床面は、地山上に赤色顔料混じりの細砂を敷いている。棺蓋に浦大間第4号石棺に類似した彫りこみがある。当初、副葬品は鍬先1点、鉄斧1点、刀子1点、直刀2点があったが、直刀2点は売却されたという。他の副葬品は確認できたが、原位置は不明である。

④向原遺跡

昭和47年、清掃処理施設建設工事現場で家形石棺が発見され、11月25日・26日に鹿本高校考古学クラブと山鹿文化財を守る会によって調査が行われた。大字合里の向原台地上に位置する。台地一帯には縄文時代から奈良時代にかけての遺跡包含層が広がり、古代住居址や甕棺、土壙墓群が検出されている。

石棺は古墳時代中期の家形石棺で凝灰岩製である。長軸方向は東西である。棺蓋は長さ約225cm、幅約72cmで両端に縄掛突起がついている。棺身は長さ約180cm、幅約72cm、厚さ約10cm、棺内の深さ約60cmである。石棺の内面は赤色顔料が塗られている。屍床面には小石が敷きつめてある。被葬者1体を確認したが性別、年齢は不明である。

⑤広諏訪原方形周溝墓

昭和55年冬、県営圃場整備事業の際に方形周溝墓が発見され、12月25日・26日に熊本県教育委員会文化課によって調査された。大字広字諏訪原に位置する。周溝のほぼ中央部に土壙を掘って家形石棺が埋葬してある。被葬者は東頭位の成人骨1体と、西頭位の小児骨1体である。副葬品は竪櫛2点、刀子3点である。周溝は隅丸方形を呈し、北側周溝の中程が約80cm切れて進入口となっている。溝の幅は80～110cm、深さ約2m、溝の断面はU字形である。5世紀のものと考えられる。

⑥広諏訪原石棺

昭和35年8月22日、地元農家が畑の耕作中に石棺1基を発見した。故原口長之氏（元県立装飾古墳館館長）、山鹿高校考古学部OBを中心に調査が行われた。

箱式石棺である。石材は凝灰岩である。後世に動かされた痕跡はない。地表下約50cmに棺蓋が位置する。周溝はない。墓壙は、石棺より13～15cmだけ広く掘られている。墓壙の埋土には、石棺の削り屑と考えられる凝灰岩が点々と混じる。棺蓋は扁平に削平した板石1枚である。周辺の例と比較して赤色顔料が少なく、棺蓋、棺身の内面にわずかに赤色顔料が残存する程度である。

棺内は攪乱されていない。屍床面の東側石付近から歯を検出した。副葬品は刀子1点、鉄鏃1点である。刀子は歯の南側から出土した。屍床面には礫を敷かず、地山上に赤色顔料混じりの土が敷いてある。

⑦千田・浦大間方形周溝墓群

標高約70mの千田台地の東南端に位置する。昭和55年の県営圃場整備事業の際、方形周溝墓群が発見され、熊本県教育委員会文化課によって調査が行われた。

計7基の方形周溝墓が確認された。7基は南北約100m、東西約70mの範囲内にあり、大きいものは第6号、第7号の一辺約20m、小さいものは第3号の一辺約13mである。いずれの周溝も一辺の中央部が途切れ、墓域への通路となっている。主体部は1基～2基の家形石棺である。破壊されずに

残っていた第5号、第7号の石棺内では人骨を確認した。とくに第7号からは人骨5体を確認され、追葬が行われたことを示している。しかも、かなりの時間が経過してから追葬が行われており、石棺が長時間使用されていたことがわかる。副葬品は第5号の棺内から直刀、素環頭大刀、刀子、鉄鏃、第7号の棺内から櫛が出土した。周溝からは、入り口の両側を中心に古式土師器の甕や壺、小型丸底壺、小型壺、高坏などが出土した。壺は複合口縁壺で胴部は非常に丸く底部は穿孔されている可能性が高い。これらの石棺や遺物から考えて、この周溝墓群は4世紀後半から5世紀中頃のものといえる。

⑧千田・浦大間石棺群

昭和32年3月1日、地元農家が栗林の草刈り中に石棺の棺蓋が露出しているのを発見した。3月3日から山鹿高校考古学部によって調査された。調査の結果5基の石棺が発見された。

第1号石棺は舟形石棺である。主軸方向は東西である。棺身の長さ239cm（縄掛け突起の長さは各約18cm）、幅は中央部で76cm、棺内の高さ28cm、側壁上端の厚み10cmである。棺蓋は破損していたものを復元し、長さ236cm、幅は中央部で74cmである。棺身の外側に舷、棺蓋の外側に軒がある。棺身の周囲は粘土で固めてある。棺身は内部が刳り抜いてあり、両端が垂直に切つてあるため、舟形というより割竹形に近い。石材は凝灰岩である。副葬品はない。棺内全面に赤色顔料が塗ってある。古墳時代中期のものと考えられる。

第2号石棺は家形石棺である。第1号石棺の東方27mに位置する。主軸方向は北西である。棺身は、厚さ8cmに削平された板石を箱式に組み合わせてある。南側石は長さ190cmの板石1枚、北側石は長さ140cmと60cmの板石2枚である。棺幅は東側54cm、西側50cmで西側がわずかにせまい。西小口石の端を側石にわずかに食い込ませている。棺底に底石はない。礫を粘土で固めて屍床面としている。石棺の周囲を粘土で固めていない。棺蓋は屋根形で軒をもつ。棺蓋は動かされている。屍床面で伸展葬の人骨4体分を確認した。東頭位の2体が西頭位の2体より早く埋葬されている。各2体間の埋葬順序は不明である。副葬品は竪櫛4点、刀子1点、鉄刀1点と水銀朱の付着した木片である。鉄刀は長さ95cmである。

第3号石棺は家形石棺である。第2号石棺と約1mの間隔をおいてほぼ平行している。主軸の方向は北西である。石棺の構造は第2号石棺とほぼ同様である。棺内に第2号石棺と同様に人骨4体分が埋葬してあった。被葬者の年齢、性別、埋葬順序は不明である。棺蓋の西南ほぼ中央部に径15cmほどの穴があり、その穴に栓をするように、石製の蓋がはめ込んである。

第2号、第3号石棺上に積み上げてあった破片から石棺2基を復元できた。石材は凝灰岩である。一基の棺蓋外面には、持松第3号家形石棺棺蓋の彫刻に類似した彫刻がある。

⑨持松塚原古墳

標高60mの平坦な台地面に位置する。昭和42年12月12日、構造改善事業持松圃場整備事業に際して熊本県教育委員会文化課によって試掘調査が行われた。その結果、幅1.8mもある巨大な石棺（舟形または家形）の一部が確認された。棺蓋に装飾状の彫刻があり、内部主体が重要と考えられて県指定史跡になった。

参考文献

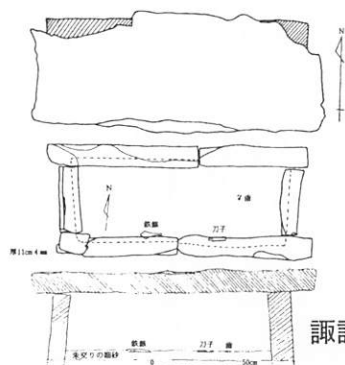
鹿央町史編纂室『鹿央町史』1989年

城北史談会『石人』第1巻第9号1960年

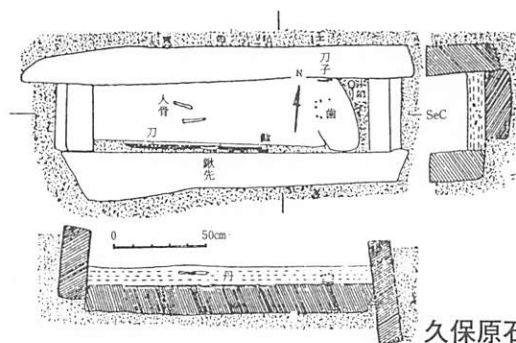
山鹿文化財を守る会『西日本新聞に見る鹿本菊池の文化財誌』1996年



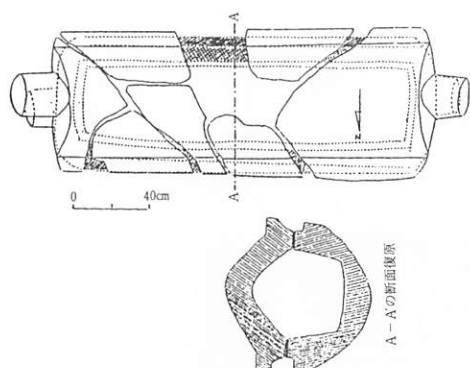
第2図 周辺遺跡分布図 (S = 1/10000)



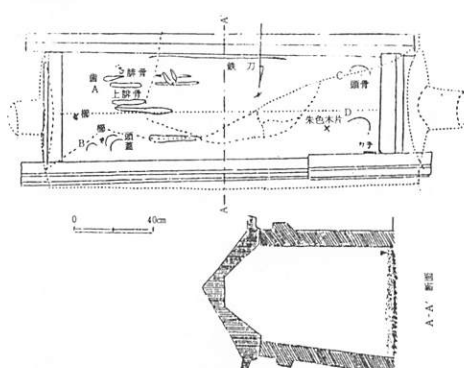
諏訪原石棺



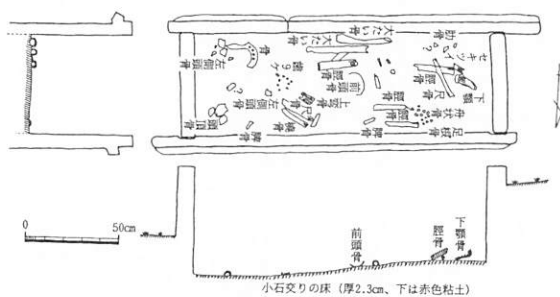
久保原石棺



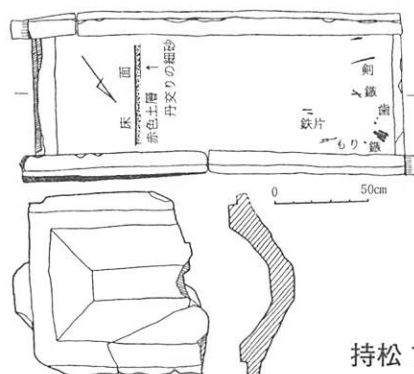
浦大間1号石棺



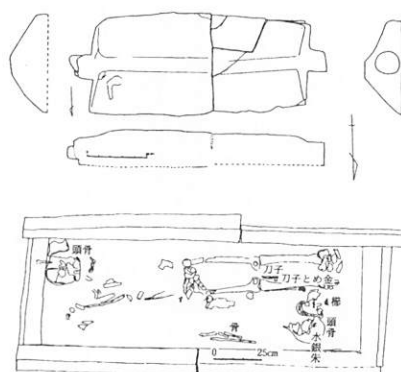
浦大間2号石棺



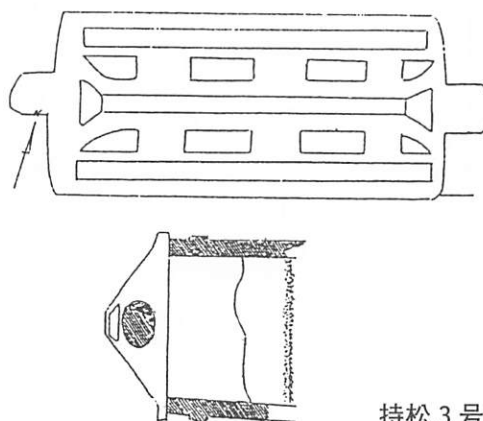
浦大間3号石棺



持松1号石棺



持松2号石棺



持松3号石棺

3. 調査の経過

平成15年

- 12月16日 鹿央町公民館横の大字広諏訪原243-3番地をテニスコート建設のためバックフォーで掘削中に石棺が出土する。県立装飾古墳館木崎学芸課長から指導を受け熊本県教育委員会文化課に報告。
- 12月18日 遺跡発見届け（57条-6）を熊本県教育委員会文化課に提出。山鹿市立博物館中村首席研究員から周溝の確認、人骨の対処方法について指導を受ける。
- 12月25日 熊本県教育委員会文化課西住係長、装飾古墳館江本副館長と今後の対応を現地協議。
- 12月26日 バックフォーでの表土剥ぎを行う。露出していた家形石棺の他に石棺1基の存在を確認した。

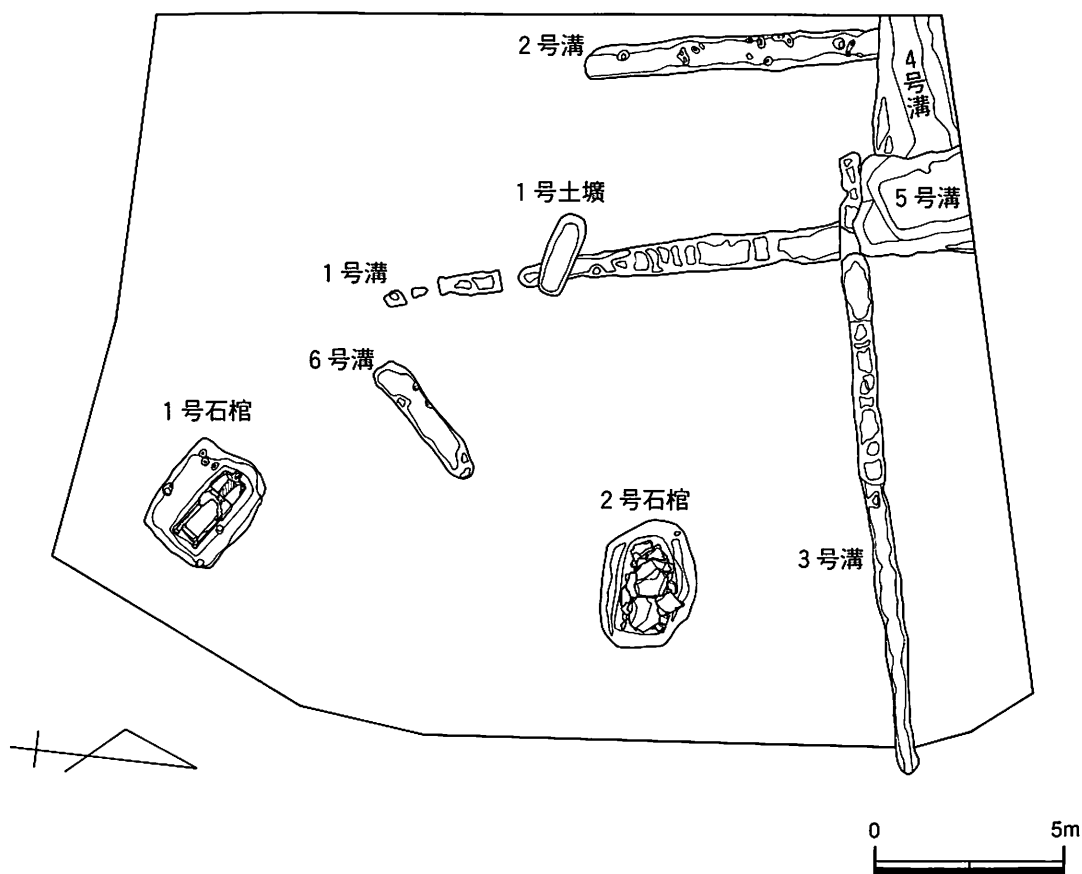
平成16年

- 1月16日 熊本県教育委員会文化課に遺跡地図変更届、発掘届を提出。
- 1月21日 座標杭設定、レベル移動。
- 1月26日 調査区の半分を精査し遺構を確認した。調査区北に東西にのびる幅約50センチの溝状遺構を確認した。家形石棺は覆土にL字状のバンドを残して除去する。
- 1月28日 1号石棺の掘り方を確認し、掘り下げた。東側棺外から袋状鉄斧、鉄鏃が出土した。
- 1月29日 2号石棺の掘り方を確認して掘り下げを行い、平面図の作成。溝状遺構の一部を試掘。
- 2月3日 1号石棺の人骨の状態を確認。
- 2月4日 2号石棺の蓋石を取り上げる。
- 2月5日 2号石棺内の掘り下げ開始。
- 2月9日 1号石棺の蓋石を取り上げる。屍床面を精査し被葬者が2体であることを確認。2号石棺の屍床面から人骨片を確認。
- 2月13日 溝状遺構の断面図作成。
- 2月19日 II区の調査開始。上面で3基の石棺を確認した。
- 2月23日 土井ヶ浜人類学ミュージアム館長松下孝幸氏に1号石棺の人骨取り上げを依頼。II区の4号・5号石棺を検出。
- 2月26日 熊本県教育委員会文化課宮崎敬士氏より鉄器の保存処理について指導を受ける。
- 2月27日 II区の3号石棺を検出。
- 3月1日 1号石棺の掘り方を確認。
- 3月3日 II区の3号・4号・5号石棺を完掘し取り上げ。
- 3月9日 2号石棺の屍床面の掘り下げ。
- 3月17日 1号土壙を検出。
- 3月24日 1号石棺の棺身を取り上げ。
- 3月29日 2号石棺の棺身を取り上げ。

4. 調査の成果

(1) I 区

町民テニスコート新設予定地を広諏訪原遺跡Ⅰ区と設定した。現在この場所は荒地となっていたが、数年前までは畑として利用されていた土地である。検出した遺構は家形石棺1基、石棺系竪穴式石室1基、土壙墓1基、溝6条である。家形石棺からは2体の被葬者を確認し、副葬品は棺内に鉄刀1点、棺外に袋状鉄斧1点、鉄鏃3点であった。石棺系竪穴式石室の棺内からは刀子1点が出土した。土壙墓からは刀子1点が出土した。



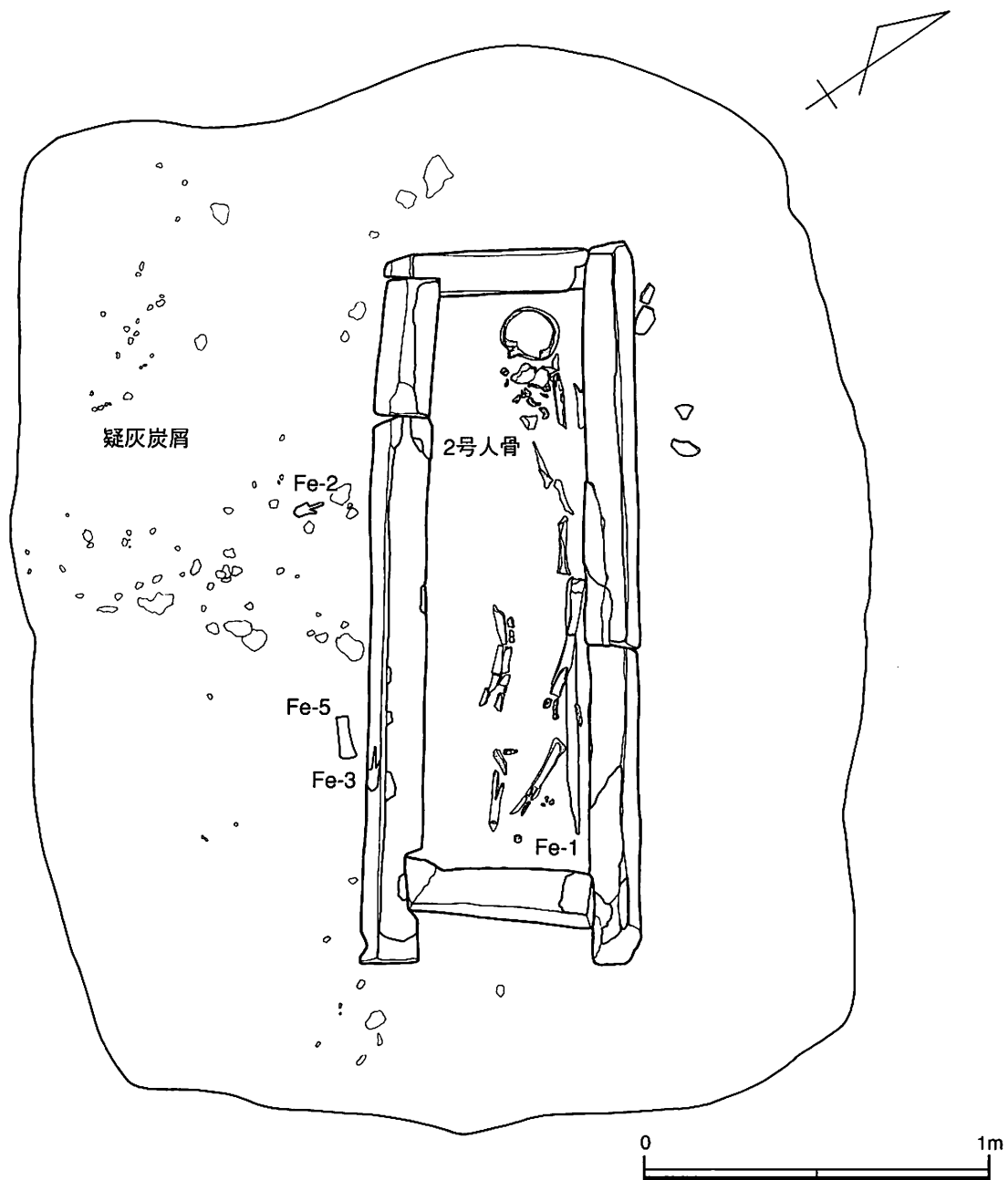
第5図 I 区遺構配置図 (S = 1/200)

1号石棺 (第6図・第7図)

1号石棺は家形石棺である。2号石棺の南側約10mの位置から出土した。石材は阿蘇溶結凝灰岩である。これはⅠ区を調査する契機となった石棺で、調査段階では棺蓋のおよそ半分がバックフォーによって破壊されており、棺内の人骨が露出していた。棺蓋の破壊された部分は、すでに廃土処理されていたため回収できなかった。また、残存していた棺蓋は石材が非常に軟質な凝灰岩であったため、取り上げる際に破損し復元できなかった。

棺蓋は南東側半分が破壊されていたうえ、棺蓋上面は表土下30cm～40cmと浅いところに位置していたため、耕作機による削平を受けていた。したがって、棺蓋上面の形状は不明である。蓋は組合式である。蓋の小口部に円柱状縄掛け突起をひとつ造り出している。破壊されているために確認できなかったが、対面の小口部にも同様の縄掛け突起が造り出してあったと考えられる。

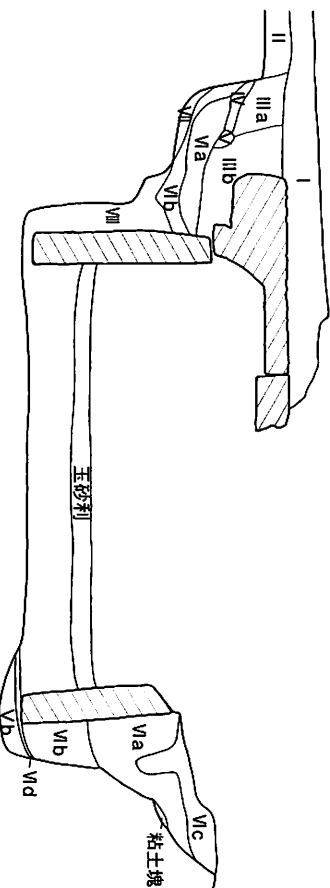
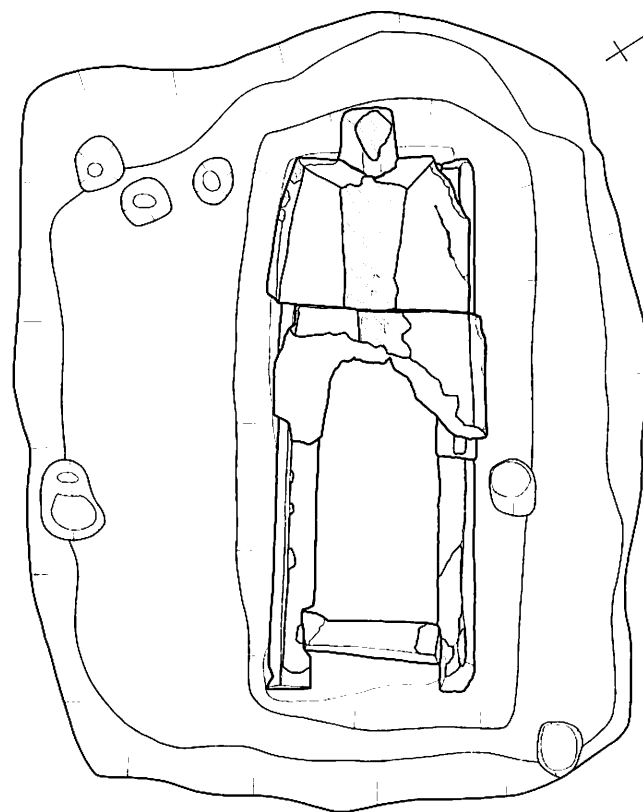
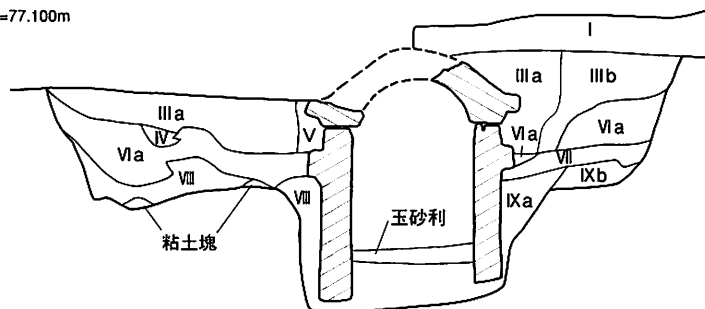
Fe-4



第6図 1号石棺検出状況平面図 (S = 1/20)

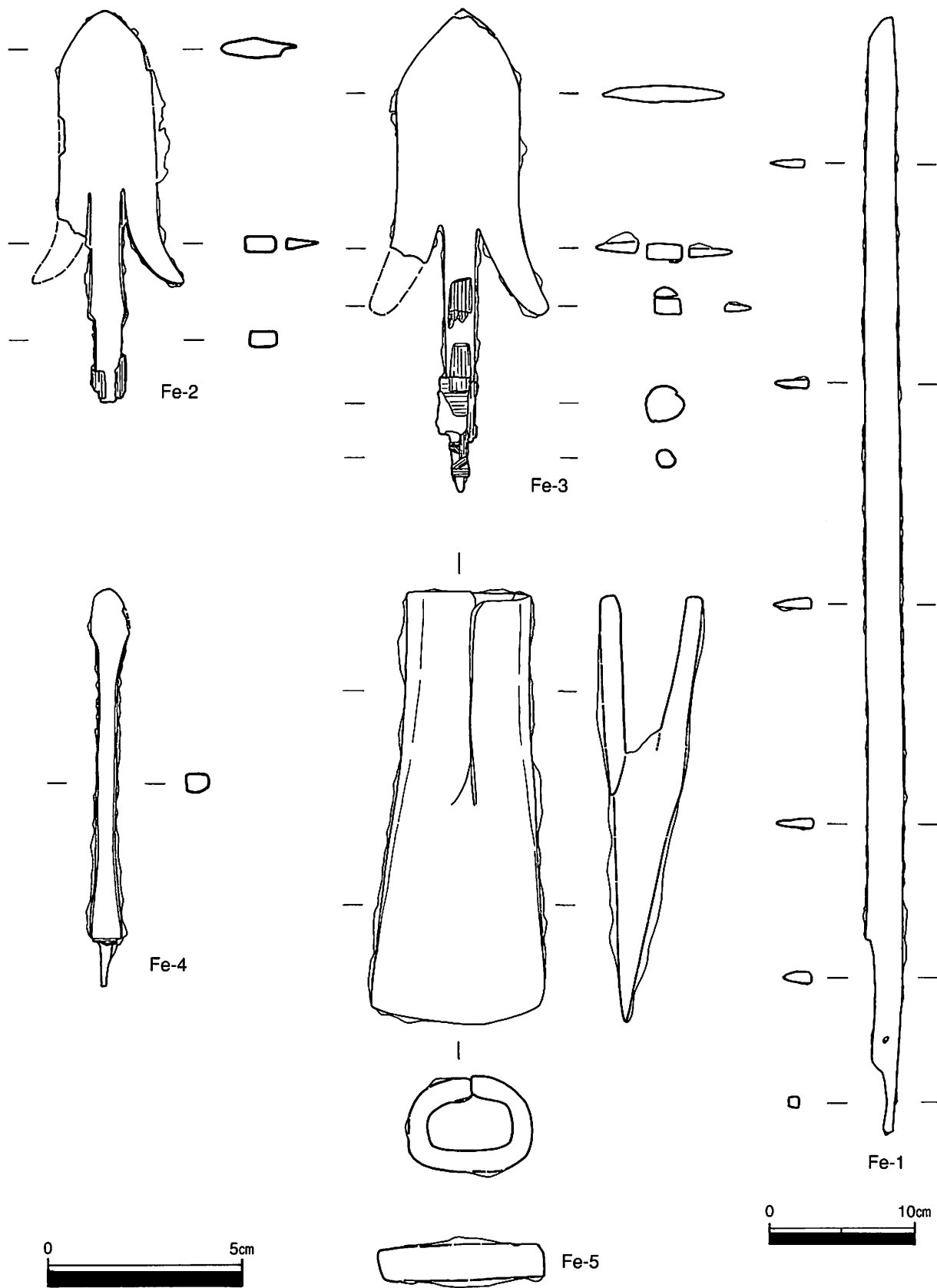
- I 層 : 暗褐色土(10YR3/3)耕作土層。ややしまる。粘性なし。白色砂粒・炭化物粒・焼土粒を含む。植物根を多く含む。
 II 層 : 暗褐色土(7.5YR3/3)しまる。僅かに粘性。ややシルト質。白色砂粒をごく僅かに含む。植物根僅かにあり。
 III a 層 : 黒褐色土(7.5YR3/2)よくしまる。粘性あり。ややシルト質。植物根あり。
 III b 層 : III a 層と同一だが、やや不均一でしまっている。黄褐色粘質土粒をごく僅かに混入している。
 IV 層 : 暗褐色土(7.5YR2/2)しまる。粘性あり。シルト質。
 V 層 : 明るい黄褐色土(10YR7/6)粘質土のブロック。
 VI a 層 : 褐色土(7.5YR4/4)よくしまる。きわめて粘質。シルト質だが不均一な土質。
 VI b 層 : VI a 層よりも粘性が弱く、しまりが無い。
 VI c 層 : VI a 層に凝灰岩塊を含む。
 VI d 層 : VI a 層に砂粒を含む。
 VII 層 : 暗褐色土(10YR3/3)よくしまる。やや粘質。
 VIII 層 : 暗褐色土(10YR3/3)よくしまり、粘質である。VI 層土塊を多量に混入する。
 IX a 層 : 褐色土(7.5YR4/4)よくしまる。きわめて粘質。
 IX b 層 : IX a 層よりもよくしまる。

—— L=77.100m



0 1m

第7図 1号石棺断面セクション図 (S=1/30)



第 8 図 1 号石棺出土遺物実測図 (Fe-1 ~ 4, S = 2/3 Fe-5, S = 1/4)

棺身は組合式である。長さ約207cm・幅約82cm（内法長さ約168cm・幅約44cm）で、屍床面までの深さは約50cmである。小口石はそれぞれ1枚、側石は両側とも2枚の板石を組み合わせており、計6石が使われている。側石には外側の上端から8cmの部位に舟べり状突帯が造り出されている。小口石と側石の接合面は側石を刳り抜いて小口石をはめ込んでいる。

棺内にはベンガラが赤々と塗られている。また蓋身ともに棺内は非常に丁寧な加工がなされており、ほぼ平坦である。一方、棺外の舟べり状突帯は棺内側と同様に丁寧な加工で造り出されているが、棺外のその他の部分では棺内に比べ加工が粗い。特に棺蓋の外側面は平坦面が形成されず凹凸がある。屍床面は地山面を掘り下げて粘土を敷き詰め、その上に直径2～3cmの玉砂利を約7cm程の厚さで敷いている。

棺内から2体の被葬者を確認した。埋葬順に1号人骨、2号人骨とする。1号人骨は遺存状態が悪く年齢、性別、身長は不明であった。頭位は南東である。2号人骨は熟年男性で身長は不明である。頭位は1号人骨と真逆で北西である。1号人骨、2号人骨ともに伸展葬と考えられる。2号人骨を埋葬する際、1号人骨を棺の東端に寄せて埋葬スペースを確保してある。

副葬品は、棺内から鉄刀1点（Fe-1）、棺外から鉄鏃3点（Fe-2～4）、袋状鉄斧1点（Fe-5）、土師器の破片が出土した。Fe-1は鉄刀である。棺東端に寄せられた1号人骨の下から出土した。刃部を内側に茎を南側に向いた状態で出土した。出土状況から考えて1号人骨に伴う副葬品と考えられる。全長75.0cm、茎13.3cm、刃部61.7cmで完形である。わずかに内側に反っている。目釘穴は1ヶ所である。Fe-2・3は腸扶式鉄鏃である。どちらも茎部分に木質が付着している。Fe-4は鉄鏃である。墓外から出土した。刃部の残りが悪く形式は不明である。Fe-5は袋状鉄斧である。棺身西側の舟べり状突帯上から出土した。全長11.1cm、袋口長径2.2cm、同短径1.2cm、刃部幅4.4cmで完形である。また、2号人骨は原位置を留めていたが、棺内東側に寄っているため、棺内西側には何か副葬品があったのかもしれない。

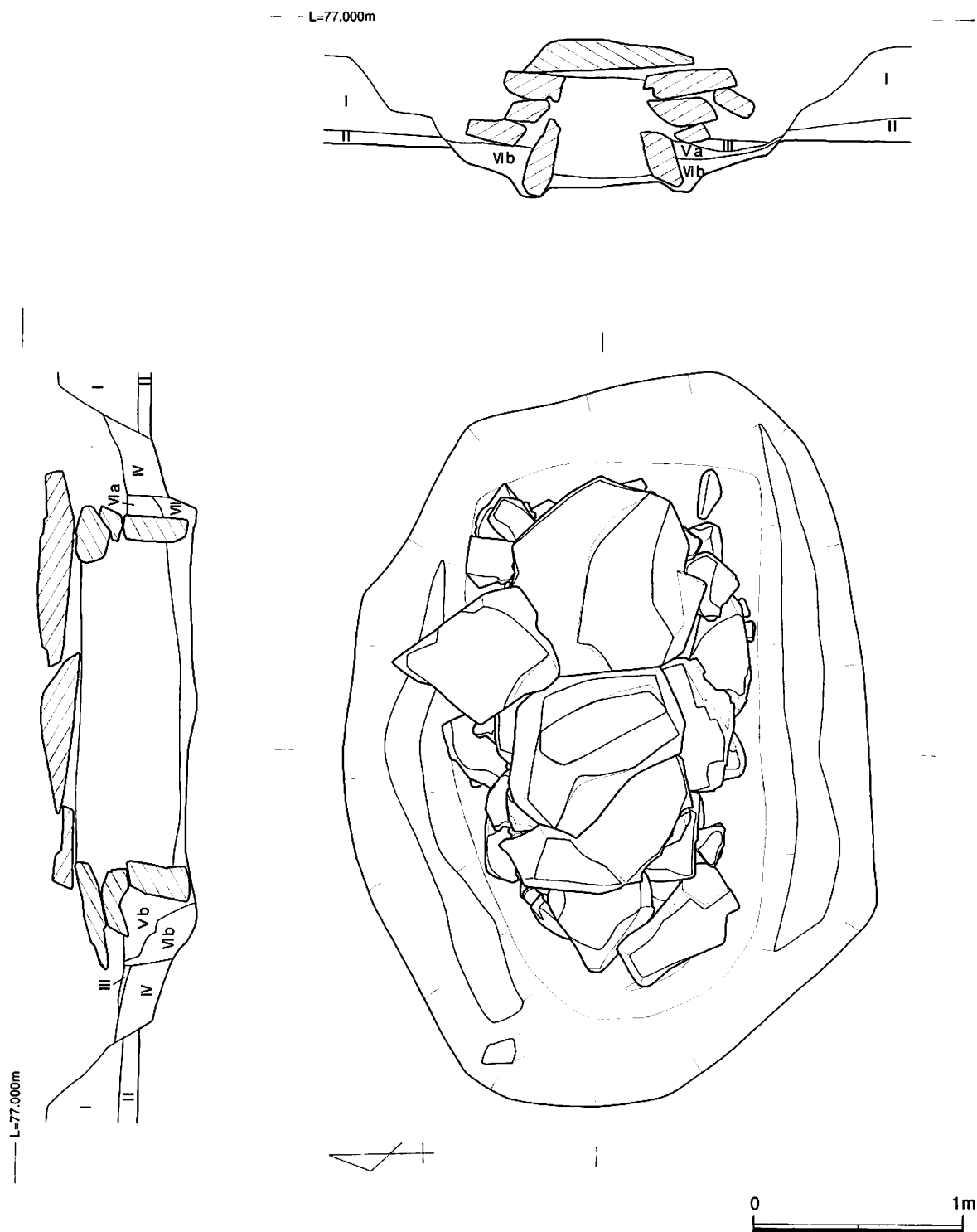
墓域は隅丸方形を呈し、南北方向318cm、東西方向249cmである。墓域の東側に石棺が寄っており、東側面から石棺を造り始めたことがわかる。墓域上面の西側には凝灰岩の屑が散在していた。これは石棺を現地で調整していた痕跡と考えられる。そして棺外副葬の袋状鉄斧（Fe-2）は、この最終調整に使用された可能性がある。棺材をとりあげて完掘すると両側石の傍から柱穴を検出した。これらは墓域上面では確認できなかった柱穴であり、石棺組み立てに伴う柱穴かもしれない。

出土遺物から石棺の時期は4世紀後半～5世紀前半頃と考えられる。

2号石棺（第9図・第10図）

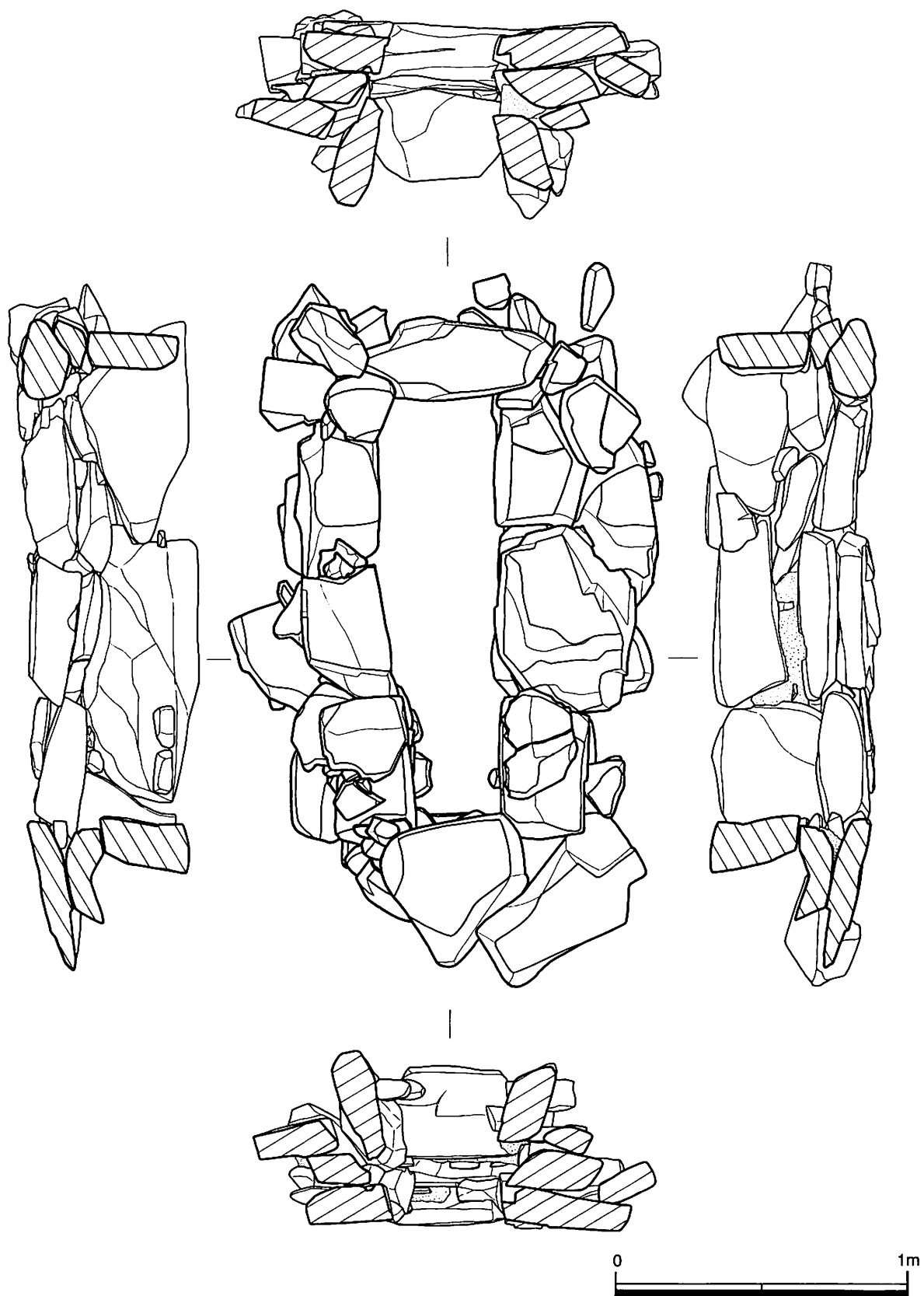
2号石棺は石棺系竪穴式石室である。1号石棺の北側約10mの位置から出土した。1号石棺と同様に地表面下約30cmに棺蓋上面が位置する。未開封の石棺であった。棺蓋には扁平な自然石を積み重ねてあり、棺蓋検出当初は一般的な箱式石棺と考えたが、全体を検出してみると、棺身のづくりが基礎に大きな石を立て、その上に大小の石を平積みする特異なものであった。石材のほとんどが千枚岩で、棺身に凝灰岩が2石使用してあった。蓋石には4石、棺身には100石以上が使われていた。蓋石の4石は非常に大きくそれぞれが幅90cm以上、厚さ約15cmである。また棺身の基礎石にも非常に大きい石が使用してある。石と石の隙間や棺身と蓋石の隙間には粘土で目張りがしてある。棺身は縦約234cm、幅約147cm（内法縦約156cm、幅42cm）である。

蓋石を除去すると、棺内全体に土が流入していた。棺蓋、棺身の裏側全面にベンガラが塗られていた。また蓋の表側にもベンガラがわずかに残っており、全面に塗られていた可能性もある。



- I 層 : 黒褐色土(7.5YR 3 / 2)やや粘性がある。
 II 層 : 暗褐色土(10YR 3 / 4)しまりが弱い。やや粘性がある。
 III 層 : 黒褐色土(7.5YR 3 / 2)しまりが強い。やや粘性がある。褐色土(7.5YR 4 / 4)が混入する。
 IV 層 : 暗褐色土(10YR 3 / 3)やや粘性がある。ややしまる。
 V a 層 : 褐色土(7.5YR 4 / 4)粘性が強い。しまりが強い。
 V b 層 : V a 層に暗褐色土(7.5YR 3 / 4)が混じる。
 VI a 層 : 暗褐色土(7.5YR 3 / 4)粘性が強く、よくしまる。
 VI b 層 : VI a 層に褐色土(7.5YR 4 / 4)が混入する。
 VII 層 : 褐色土(7.5YR 4 / 6)しまりが無い。粘性が弱い。

第 9 図 2 号石棺断面セクション図 (S = 1/30)

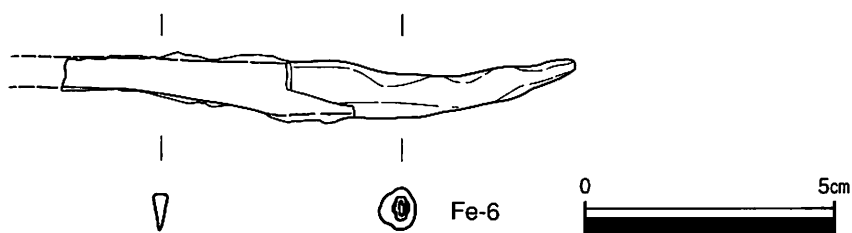


第10図 2号石棺実測図 (S = 1/20)

棺身は西側よりも東側の幅が約10cm広いため、頭位方向は東と考えられる。棺身内の堆積土を除去すると3cm程度の人骨片が残っていた。屍床面は地山直上であり玉砂利などは敷かれていない。また、平坦面を形成しておらず凹凸がある。

副葬品は刀子1点（Fe-6）であった。また、棺内流入土の中には土師器の小破片が数点混じっていた。Fe-6は刀子である。頭位方向を東とすると、およそ胸の位置から横向きの状態で出土した。茎部には柄に使用されていた動物骨または角が良く残っている。刃部が茎に比べて小さく、研ぎ減りが激しい。

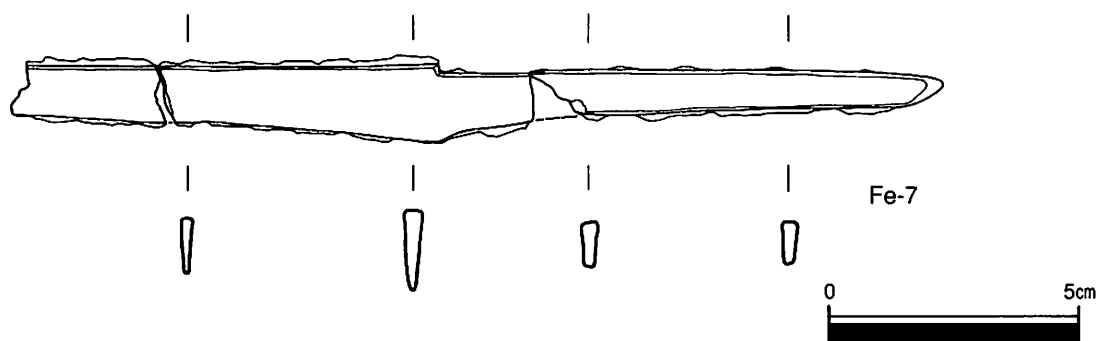
墓壙は不正楕円形である。地山面を掘り下げて石材を積み上げている。その掘り方面は1号石棺と比較すると非常に粗い。



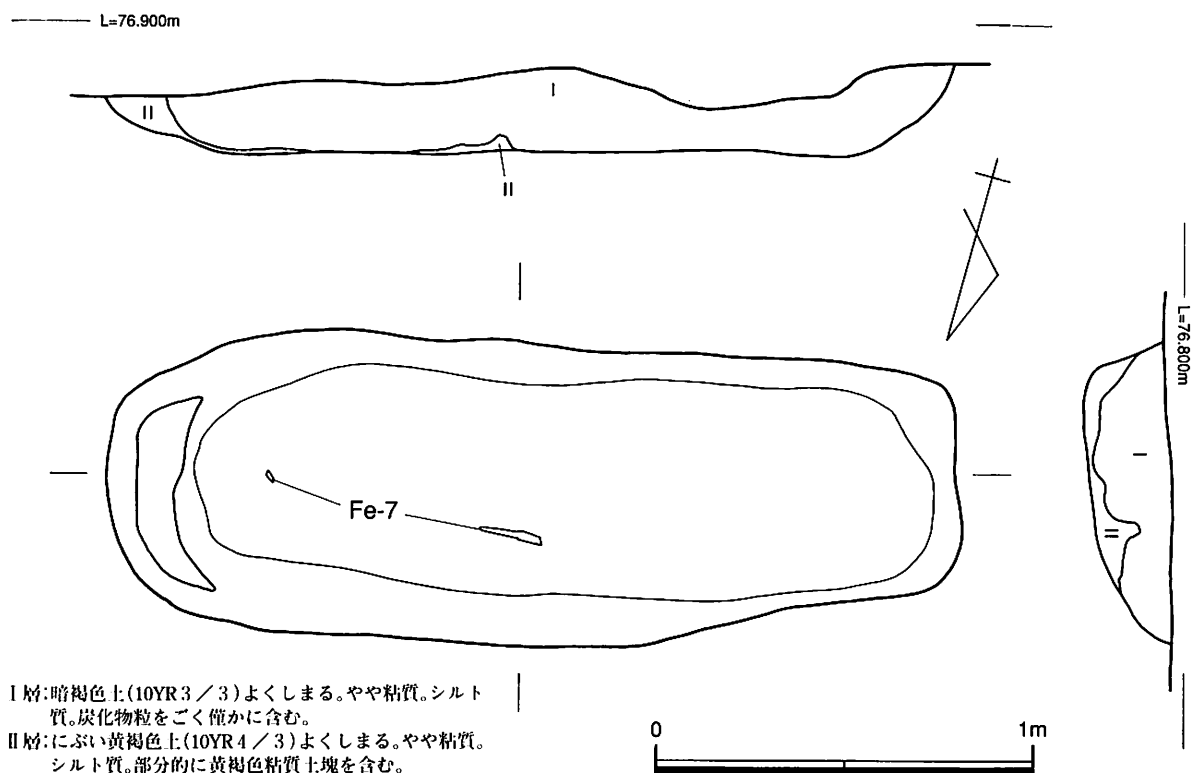
第11図 2号石棺出土遺物（S = 2/3）

1号土壙（第13図）

1号溝下から検出した。土壙内の辺縁部と中央部では層序の変化がみられず、木棺の痕跡もないため素掘りの土壙墓と考えられる。長軸方向は東西である。長さ225cm、幅82cm、深さ19～21cmである。人骨は確認できなかったが、伸展葬と考えられる。土壙内から刀子1点（Fe-7）が出土した。Fe-7は刃部の先端が欠失している。茎10.1cmである。この墓壙は1号・2号石棺とほぼ同時期と考えてよい。



第12図 1号土壙出土遺物（S = 2/3）



第13図 1号土坑実測図 (S = 1/20)

1号溝 (第14図)

全長864cm、幅98～36cm、深さ21～15cmである。1号土坑をきっている。3号溝にきられる。溝内からは近代の茶碗片が出土した。性格は不明である。

2号溝 (第14図)

全長808cm、幅100～78cm、深さ12～6cmである。4号溝をきっている。溝内からは近代の茶碗片が出土した。性格は不明である。

3号溝 (第14図)

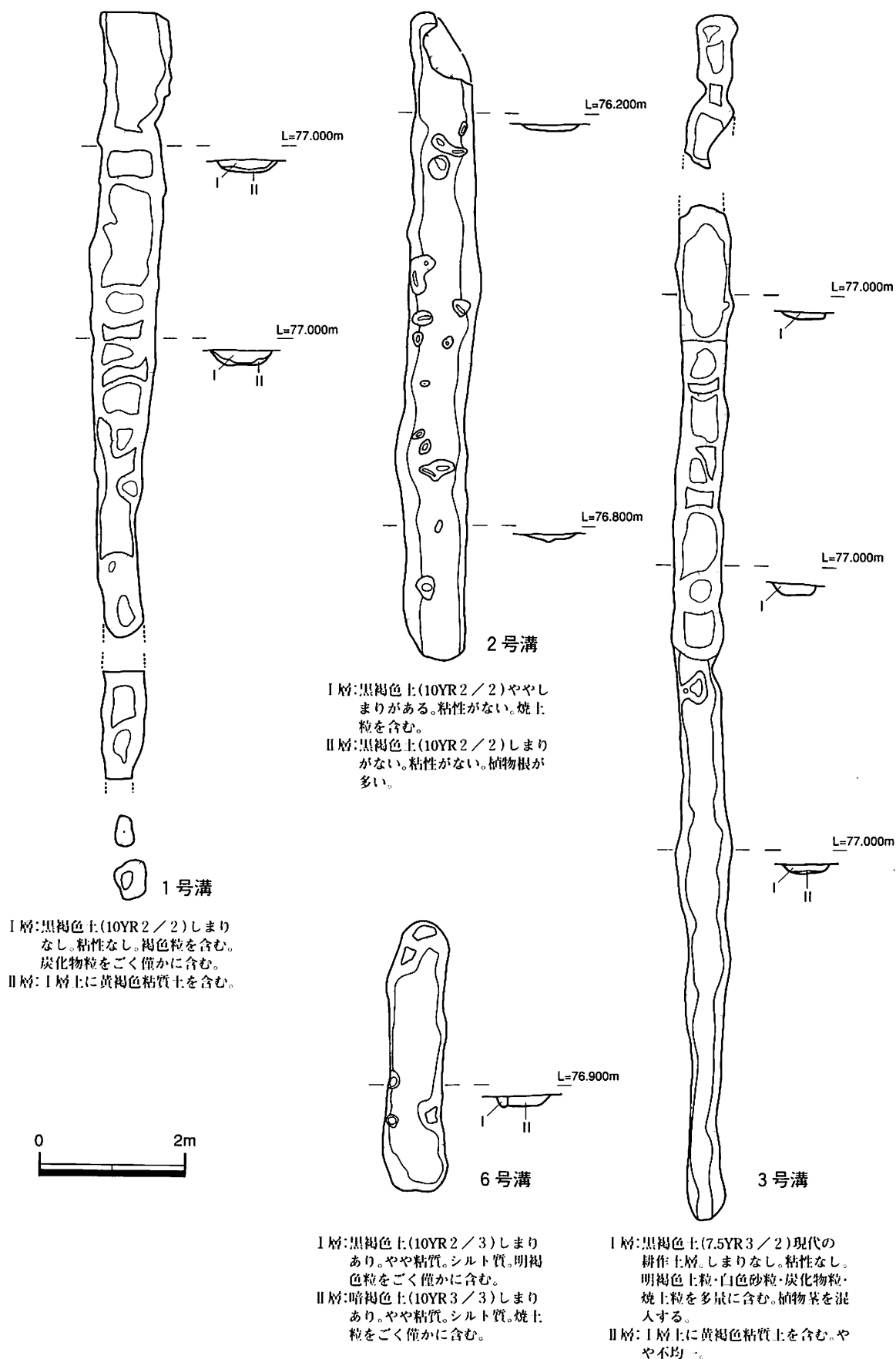
全長846cm、幅78～24cm、深さ17～8cmである。1号溝をきっている。溝内からは近代の茶碗片が出土した。性格は不明である。

4号溝 (第15図)

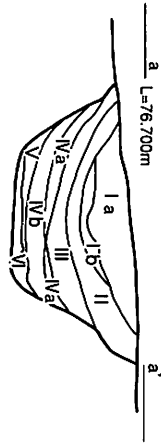
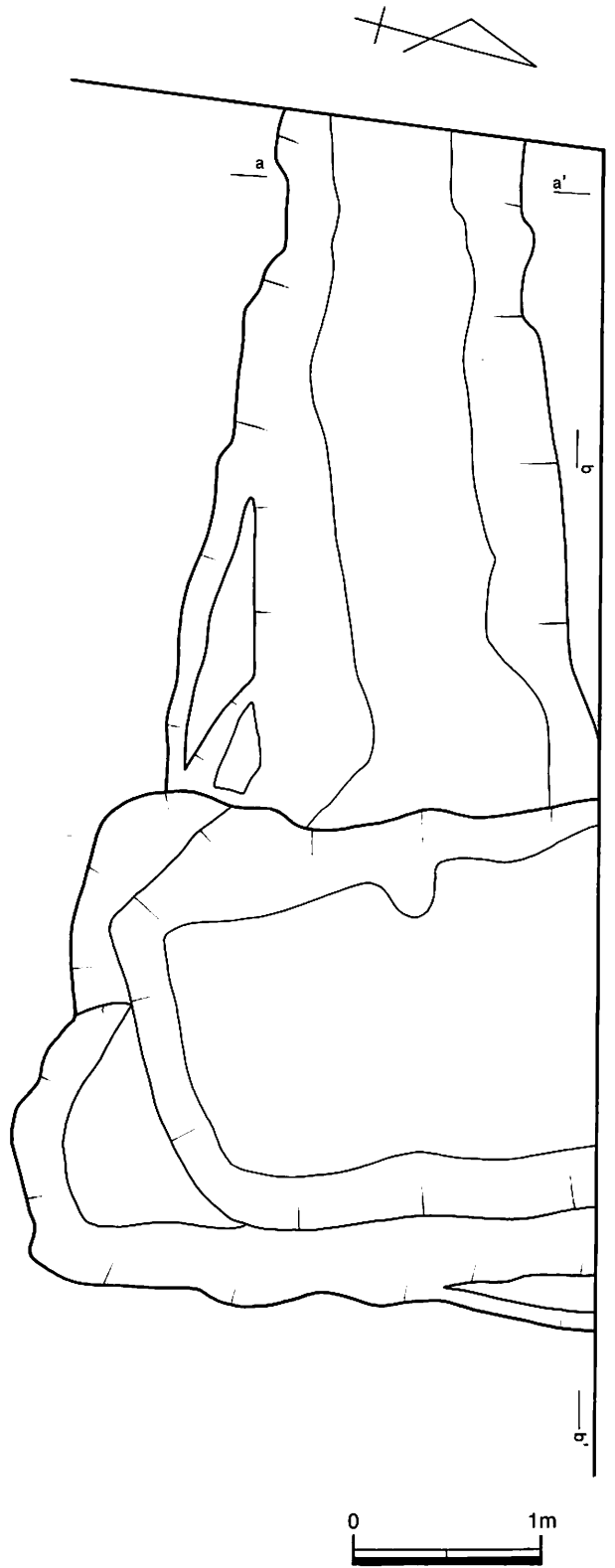
上面の幅292cm、底面の幅130cm、深さ132cm～である。5号溝をきっている。2号溝にきられる。層序から自然堆積と考えられる。性格は不明である。

5号溝 (第15図)

上面の幅420cm、底面の幅174cm、深さ96cm～である。1号・4号溝にきられる。性格は不明である。溝ではなく小路などの可能性もある。



第14図 1～3号・6号溝実測図 (S = 1/80)



4号溝

I a 層: 黒褐色土(10YR2/2)しまりなし。粘性なし。褐色粒・白色粒を含む。炭化物粒・焼土粒を僅かに含む。

I b 層: I a 層よりしまる。粘性なし。褐色土(10YR2/2)しまる。粘性なし。褐色粒・白色粒を含む。炭化物粒・焼土粒を僅かに含む。

II 層: 黒褐色土(10YR2/2)しまる。粘性なし。褐色土(10YR2/2)しまる。粘性なし。褐色粒・白色粒を含む。炭化物粒・焼土粒を僅かに含む。

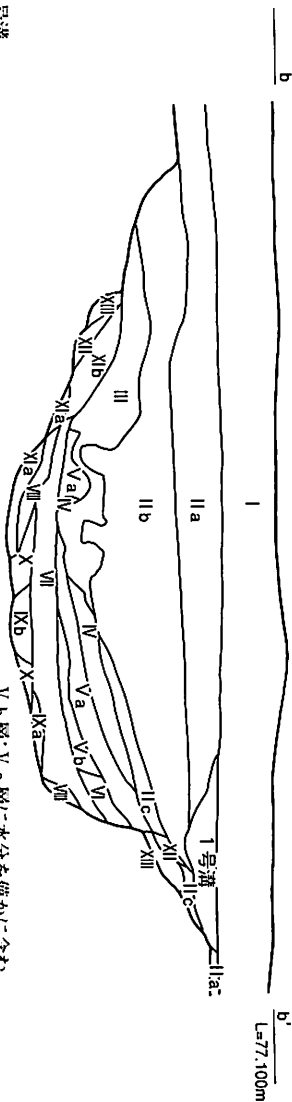
III 層: 黒褐色土(10YR2/1)しまる。粘性なし。褐色土(10YR2/2)しまる。粘性なし。褐色粒・白色粒を含む。炭化物粒・焼土粒を僅かに含む。

IV a 層: 黒褐色土(10YR2/2)しまる。やや粘質。褐色土(10YR2/2)しまる。やや粘質。

IV b 層: IV a 層よりしまりが強い。褐色土(10YR2/1)しまる。やや粘質。

V 層: 黒褐色土(10YR2/1)しまる。やや粘質。褐色土(10YR2/1)しまる。やや粘質。

VI 層: 暗褐色土(10YR3/3)しまる。粘質。シルト質だが不均一。



5号溝

I 層: 暗褐色土(10YR3/3)現耕作土層。しまり、粘性がない。砂質。きわめて乾燥している。

II a 層: 黒褐色土(7.5YR2/2)田耕作土。しまりなし。粘性なし。白色砂粒・褐色土粒を含む。

II b 層: II a 層に多量の砂礫粒・焼土粒・炭化物粒を含む。

III 層: II a 層よりしまる。炭化物粒・黄褐色粘質土粒を僅かに含む。

IV 層: 黒褐色土(7.5YR3/2)ややしまる。やや粘質。やや不均一で炭化物粒をごく僅かに含む。

V 層: 黒褐色土(7.5YR2/1)しまりなし。粘性なし。焼土粒をごく僅かに含む。

VI 層: 黒褐色土(7.5YR2/2)しまりなし。粘性なし。

V a 層: 黒褐色土(7.5YR2/2)しまりなし。粘性なし。

V b 層: V a 層に水分を僅かに含む。

VI 層: 黒褐色土(7.5YR2/1)しまりなし。粘性なし。

VII 層: 黒褐色土(10YR2/2)しまりなし。粘性なし。

VIII 層: 暗褐色土(10YR3/3)ややしまる。やや粘質。

IX a 層: 黒褐色土(10YR2/2)ややしまる。粘性なし。

IX b 層: IX a 層より粘質。

X a 層: 暗褐色土(10YR3/3)しまりなし。やや粘質。

X b 層: X a 層がやや砂質を帯び、乾燥している。植物根がやや多い。

XI 層: 黒褐色土(10YR3/2)しまりなし。粘質なし。

XII 層: 暗褐色土(10YR3/4)しまりなし。やや粘質。

XIII 層: 暗褐色土(10YR4/3)しまる。やや粘質。

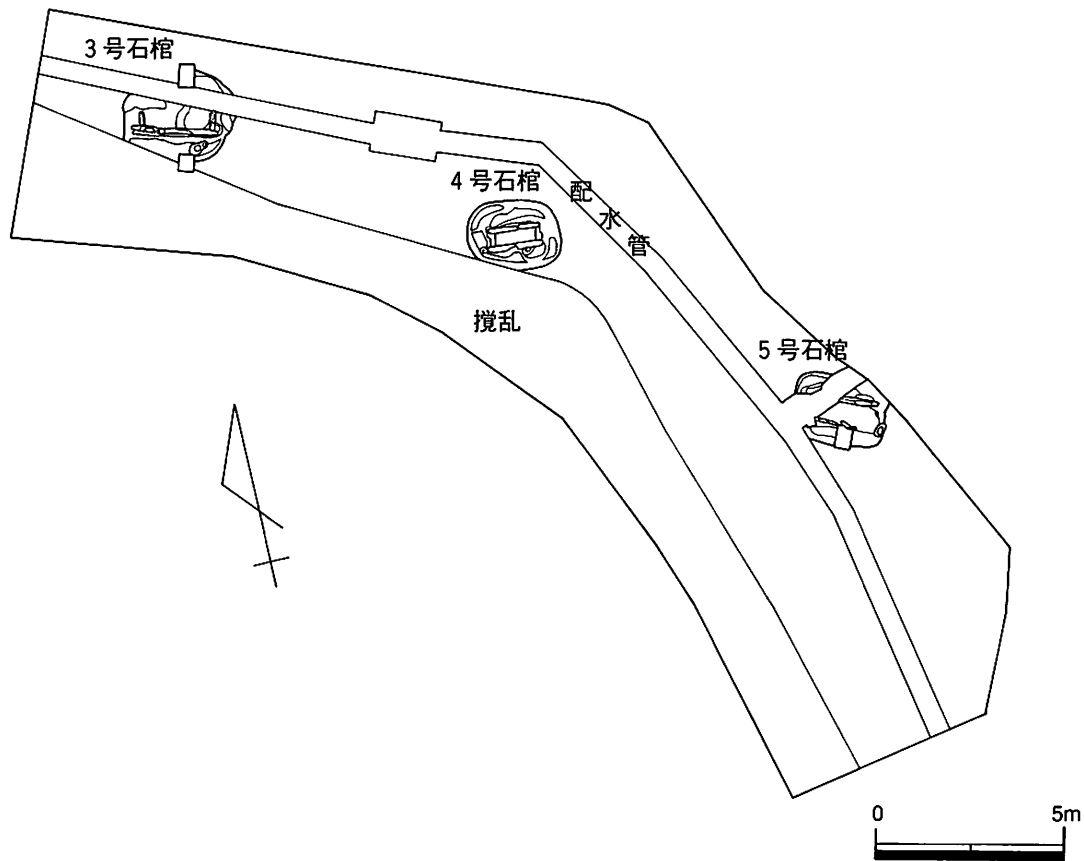
第15図 4号・5号溝実測図 (S=1/40)

6号溝（第14図）

全長372cm、幅87～64cm、深さ15～12cmである。1号石棺の周溝の一部とも考えられるが、延長部分を検出することができず性格は不明である。

（2）Ⅱ区

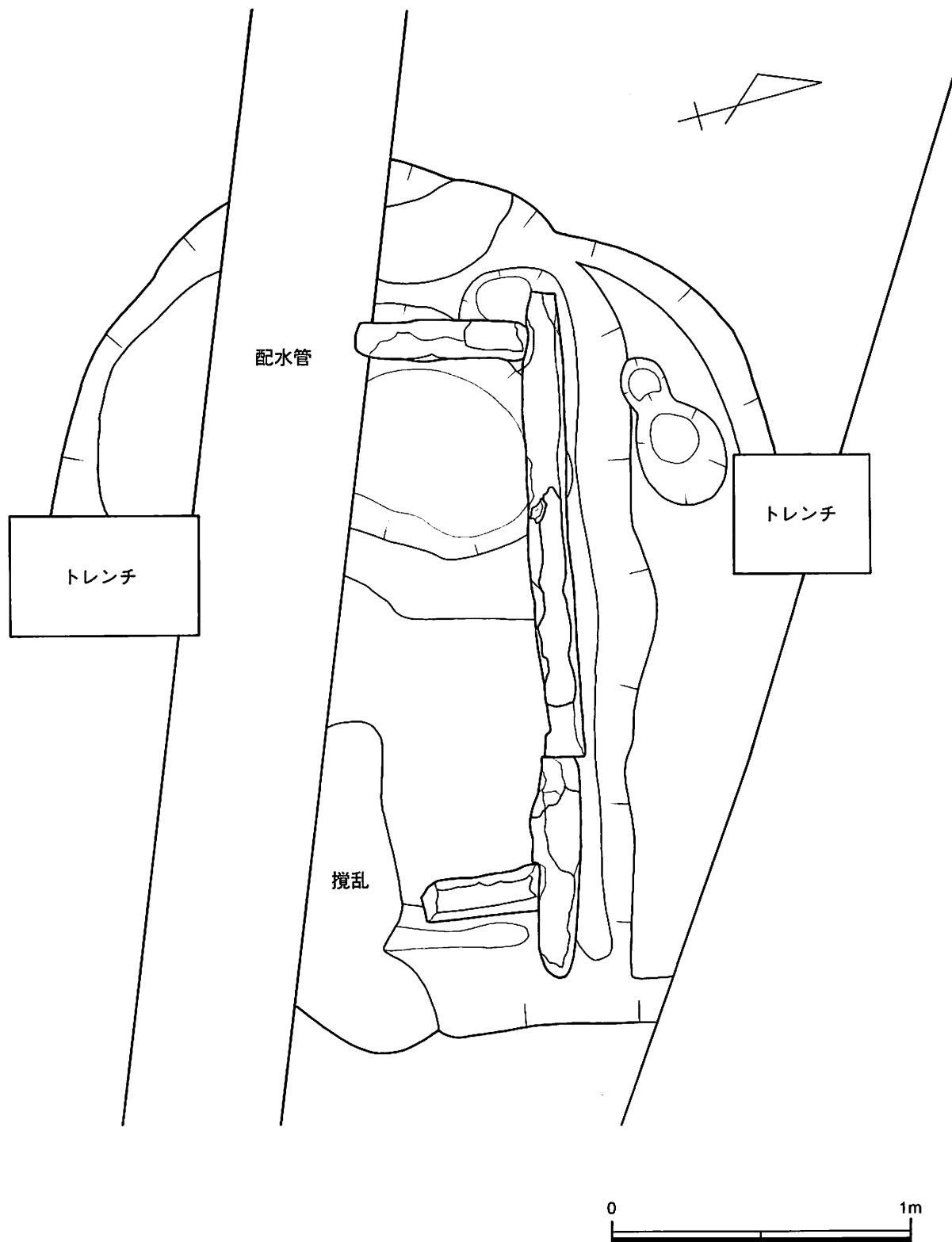
農道7号工事現場をⅡ区として調査を行った。石棺を3基検出した。いずれも家形石棺の棺身部分と考えられる。3基は約7m間隔で東西方向に並んでいる。工事以前も農道として利用されており、圃場整備事業と配水管工事によってほとんどが攪乱を受けていた。



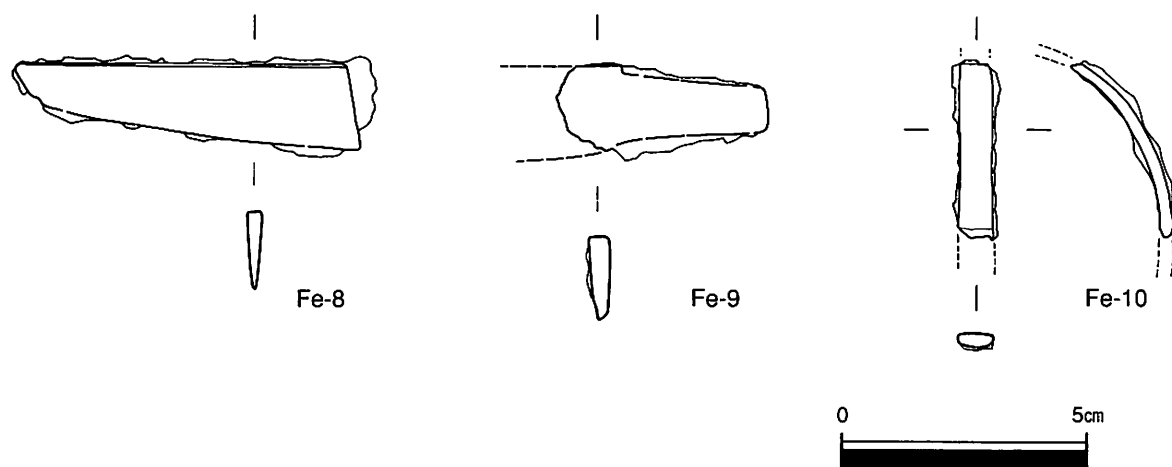
第16図 Ⅱ区遺構配置図（S＝1/200）

3号石棺（第17図）

家形石棺の棺身部分と考えられる。4号石棺の北西に位置する。棺材は阿蘇溶結凝灰岩である。石棺の大部分は過去の圃場整備、水道管工事で破壊されており、北側の側石と半裁された両小口石が残存していた。側石の上面は削平されていたが原位置を留めていると考えてよい。組合式の棺身である。側石には2枚、小口石にはおそらくそれぞれ1枚の板石が使われている。側石は長さ約230cm（内法長さ約174cm）である。側石と小口石の接合面は側石を削って小口石と組み合わせてある。石棺の長軸方向は東西である。石棺の埋土中から刀子片2点（Fe－8・9）、鉄製鋤片1点（Fe－10）が出土したが石棺に伴う遺物と考えられる。Fe－8は刀子の刃部部分である。Fe－9は刀子の茎部分である。この2点は同一個体の可能性もある。



第 17 図 3 号石棺実測図 (S = 1/20)



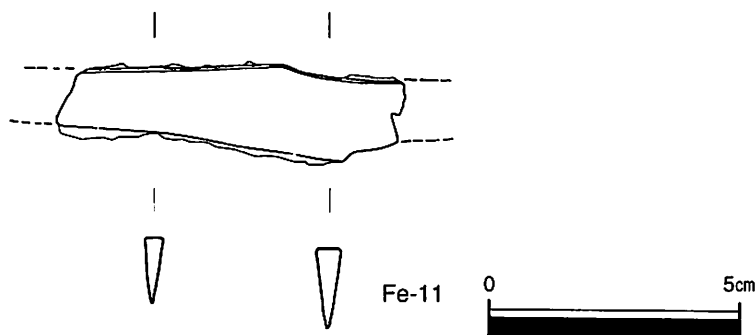
第 18 図 3 号石棺出土遺物実測図 (S = 2/3)

4 号石棺 (第20図)

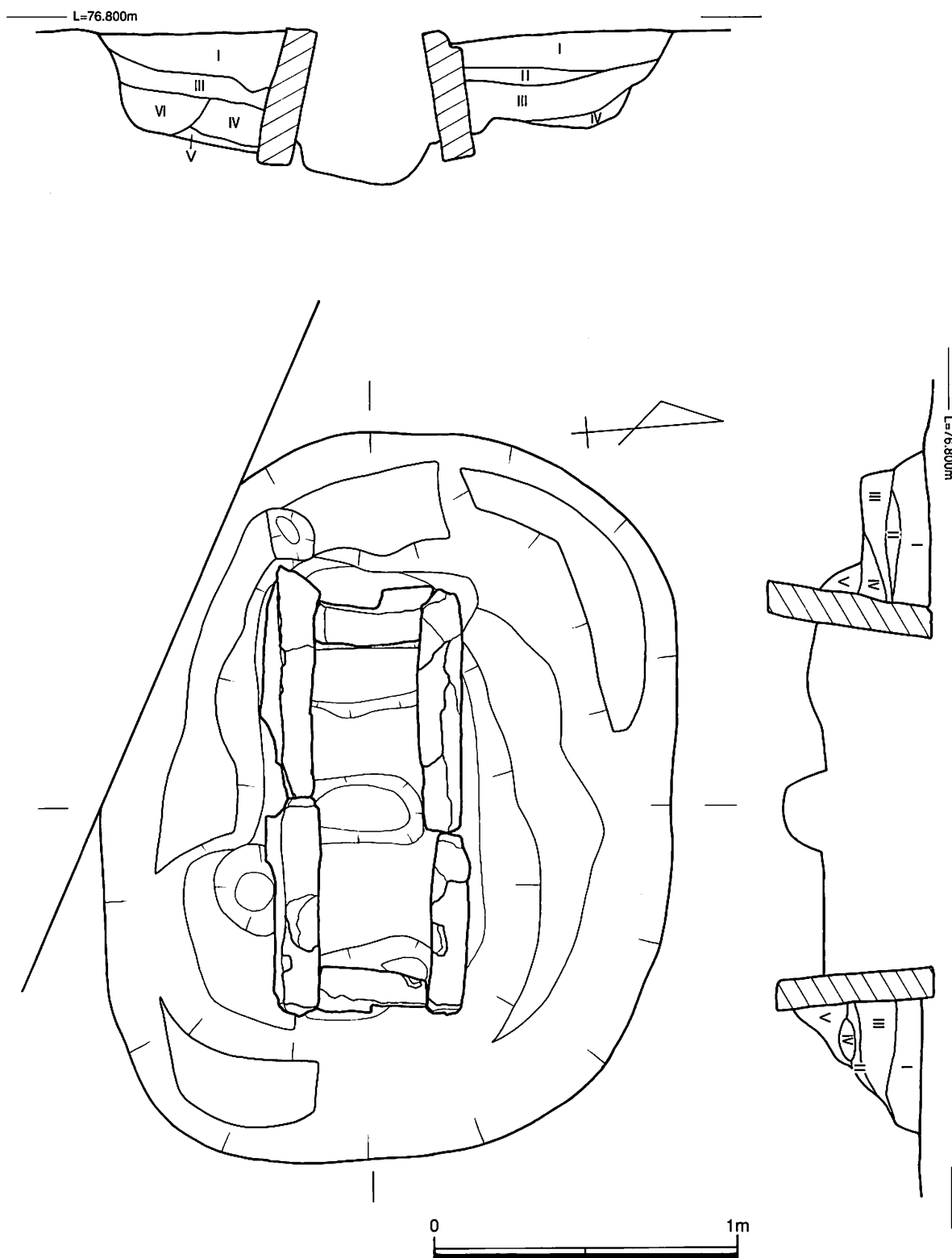
家形石棺の棺身部分と考えられる。3 号石棺と 5 号石棺の中間に位置する。棺材は阿蘇溶結凝灰岩である。石棺の蓋は既に欠失していたが、棺身は原位置をとどめており、上面の一部が残存している。ただし、墓壙の一部は攪乱を受けていた。組合式の棺身である。小口石はそれぞれ 1 枚、側石は両側とも 2 枚の板石を組み合わせており、6 石が使われている。長さ約147cm、幅約55cm（内法長さ約106cm、幅約44cm）である。棺内には棺蓋の残骸と考えられる凝灰岩が散在していた。石棺内面にはベンガラが塗られている。屍床面の西側に頭部位置と考えられる落ち込みがあるため、頭位は西と考えられる。棺内から人骨は検出できなかったが、棺身の大きさから小児用と考えられる。

5 号石棺 (第21図)

家形石棺の棺身部分と考えられる。4 号石棺の北東に位置する。棺材は阿蘇溶結凝灰岩である。蓋は欠失しており現存する棺材も原位置をとどめてはいない。石棺の埋上中から刀子片 1 点 (Fe-11) が出土した。

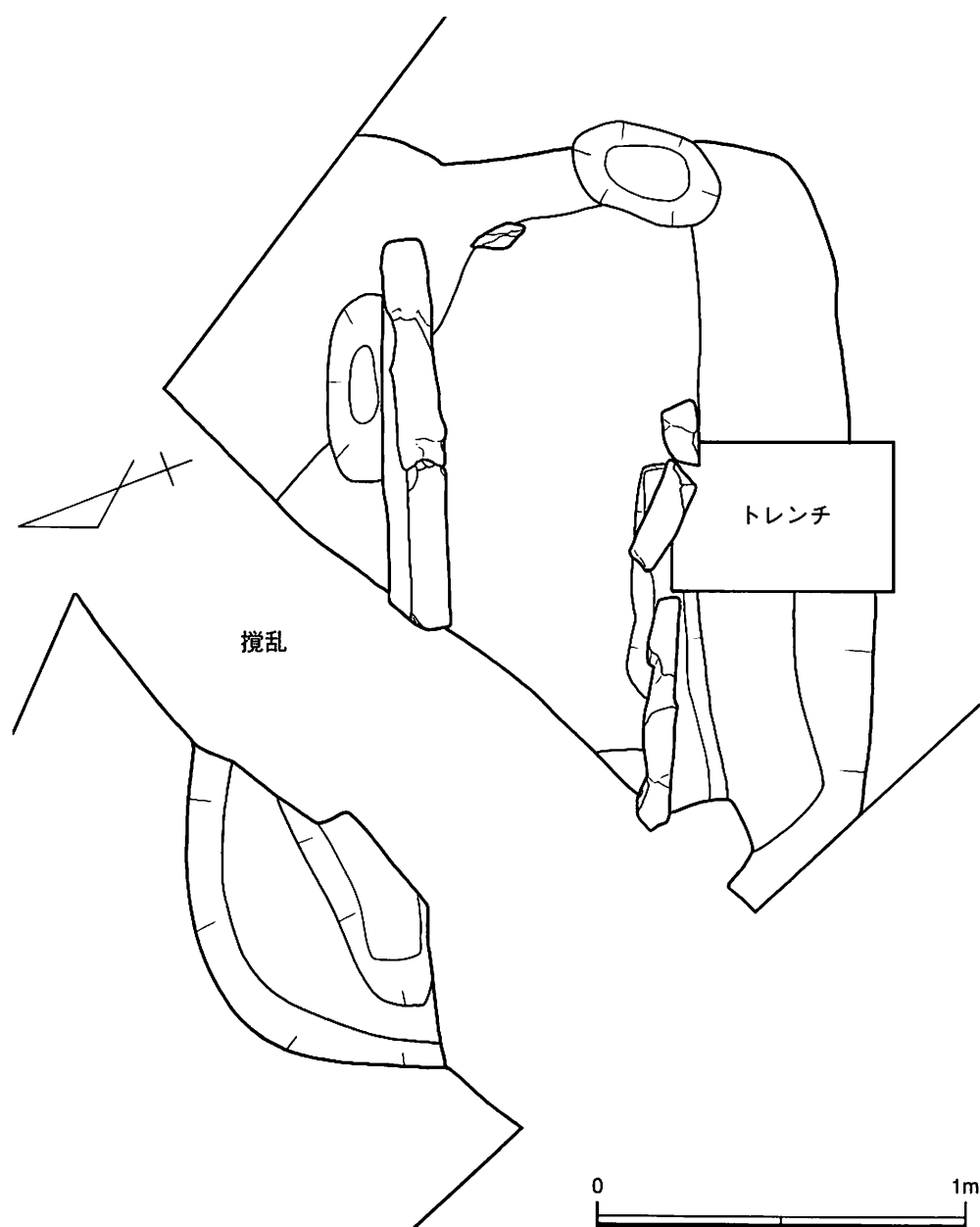


第 19 図 5 号石棺出土遺物実測図 (S = 2/3)



I層:にぶい黄褐色土(10YR 4 / 3)よくしまる。粘性なし。白色砂粒・炭化物粒を含む。植物根を多く含む。
 II層:褐色土(7.5YR 4 / 4)よくしまる。きわめて粘質。シルト質だがI層と混在しており不均一。
 III層:灰黄褐色土(10YR 4 / 2)よくしまる。粘性なし。凝灰岩塊・白色砂粒を含む。
 IV層:黒褐色土(7.5YR 3 / 2)よくしまる。やや粘質。
 V層:褐色土(7.5YR 4 / 4)よくしまる。きわめて粘質。

第 20 図 4 号石棺実測図 (S = 1/20)



第 21 図 5 号石棺実測図 (S = 1/20)

5. まとめ

今回の調査ではⅠ区から1号・2号石棺と1号土壙、Ⅱ区から3号・4号・5号石棺を検出した。1号石棺は家形石棺である。また、3号・4号・5号石棺は棺蓋を欠失していたが、棺身の造りから家形石棺であった可能性が高い。2号石棺は石棺系竪穴式石室であった。1号土壙は木棺の痕跡がなく素掘りの土壙墓であった。

家形石棺である1号・3号・4号・5号石棺には石棺の構造に共通点がみられる。まず4基の棺身はいずれも組合せ式であり、1号・3号・4号石棺は小口石が1枚ずつ、側石が2枚ずつの板石を組み合わせている。また1号・3号石棺は側石を削って小口石と組み合わせている。さらに、整然と掘られた1号・4号石棺の墓壙にも共通性がみられる。一方で、1号石棺と3号・4号・5号石棺では凝灰岩の質が異なっていた。1号石棺に利用されている凝灰岩は取り上げが困難なほどに軟質な凝灰岩であったが、Ⅱ区の3基には硬質な凝灰岩が利用されていた。また1号石棺の棺身に造り出されている舟べり状突帯が4号石棺には造り出されていない。ただしこのことは4号石棺が小型であることに起因しているかもしれない。3号・5号石棺は側石上部が削平を受けているために確認できなかった。4基の石棺は広諏訪原方形周溝墓や浦大間方形周溝墓群の主体部と形態や墓壙の掘り方が類似しているため、これらも方形周溝墓の主体部である可能性があるが、削平や攪乱のために明確な周溝を確認できなかった。

1号石棺の時期は副葬品等から4世紀後半～5世紀前半頃に位置付けられる。Ⅱ区から検出した3号・4号・5号石棺は、それぞれがほぼ等間隔に配置され、軸方向もほぼ同一であることから、同時期に計画的に築造された可能性が高い。また石棺の構造に1号石棺との類似点がみられるため1号石棺に近い時期に造られたとも考えられる。

2号石棺は石棺系竪穴式石室と呼称され、石棺とも石室ともとれる特異な形態の埋葬施設である。この形態のものは福岡県甘木・朝倉地方に群集する以外は、福岡県北九州市、佐賀県鳥栖市などの古墳群中に例外的に存在しているだけである。県内では山鹿市と三角町での検出例がある。この石棺系竪穴式石室については竪穴式石室を母胎として発生し箱式石棺の影響を受けて成立したと考えられている(中間1986)。2号石棺は未開封であったが、棺内には土が流入しており人骨は残存していなかった。副葬品は刀子1点であり、埋土中の遺物も土師器片が数点だけで時期決定はできなかった。ただし、2号石棺は1号石棺と隣接していること、中間氏が分類したB1類に属し5世紀前半の後半代という時期設定がしてあることから、1号石棺と同時期頃に築造されたと考えられる。

以上の結果と過去の調査例も合わせて考えると、広諏訪原遺跡一帯が古墳時代に墓域として利用されていたといえよう。また、広諏訪原遺跡の位置する小規模な舌状台地の辺縁部からは浦大間方形周溝墓群・石棺群、持松石棺群、久保原石棺などが検出されている。いずれも石棺の造りや副葬品からほぼ同時期のものとして考えられるため、4世紀後半から5世紀中頃にかけて台地上に墓域が形成されていたといえる。

参考文献

鹿央町史編纂室『鹿央町史』1989

後藤守一「原始時代の武器と武装」『考古学講座』第二巻 雄山閣

中間研志「竪穴式石室・石棺系竪穴式石室」『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告』(6)福岡県教育委員会1986

『浜ノ洲貝塚・丸小島古墳』熊本日日新聞社・熊本県宇土郡三角町 1987

付編 熊本県鹿央町広諏訪原遺跡出土の古墳人骨

松 下 孝 幸*

キーワード：熊本県、古墳人骨、家形石棺、男性

はじめに

熊本県鹿本郡鹿央町大字広230番地に所在する広諏訪原遺跡の発掘調査がテニスコート建設工事に先だって、2004年（平成16年）2月におこなわれ、家形石棺から人骨が検出された。今回発掘された石棺は道路工事中に発見されたものも含めると5基であるが、人骨は1基の石棺（1号石棺）のみから検出された。またこの石棺からは2体の人骨が検出された。

筆者が調査に携わったり報告書を書いた熊本県内の古墳時代の遺跡には、益城町の福原横穴墓（松下・他、1985 a）、玉名市小路石棺（松下、1985 b）、熊本市古城横穴墓（松下・他、1985 c）、鹿本町津袋大塚東側1号石棺（松下・他、1986 a）、山鹿市湯の口横穴墓（松下・他、1986 b、1988）と舞野遺跡（松下・他、1989 c）、七城町瀬戸口横穴墓（松下・他、1989 a）、中央町四十八塚5号墳（松下・他、1989 b）、宇土市西潤野2号墳（松下・他、1992）、熊本市五丁中原遺跡（松下、1997）があるが、盗掘を受けている古墳が多く、人骨の保存状態はあまりよくなかった。

本例も保存状態はよくなかったが、できる限り現場で詳細に観察し、性別や年齢を推定することができたので、その結果を報告しておきたい。

なお、人骨の発掘調査は筆者の他に松下真実、松下玲子がおこない、人骨の整理復元保存処理は中野江里子が担当した。

資 料

今回の調査によって発掘された石棺は5基であるが、人骨は1基の家型石棺（1号石棺）からのみ検出された。石棺内を精査したところ、2体分の人骨が検出された。先に埋葬された被葬者の遺骨を1号人骨、追葬されたものを2号人骨とした。保存状態は2号人骨の方が良好であった。表1に示すとおり、2体のうち1体（2号人骨）は男性骨であるが、残りの1体は性別を判別することができなかった。なお、年齢区分は表2のとおりである。

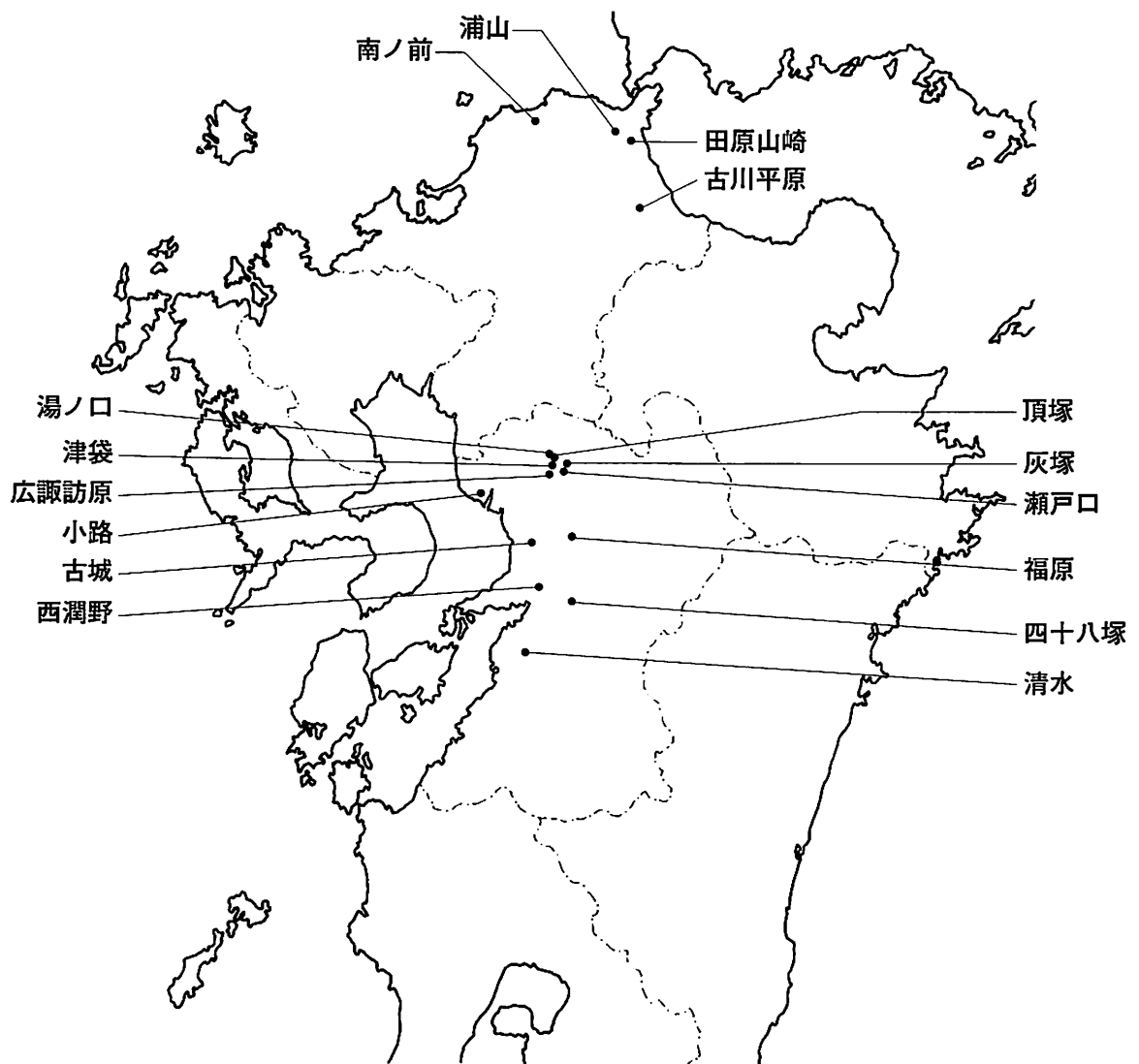
表1 出土人骨一覧（Table 1. List of skeletons）

墓番号・人骨番号	性別	年齢	備考（埋葬施設、甕棺の状態、頭位）
1号人骨	不明	不明	家形石棺、南東頭位、保存不良
2号人骨	男性	熟年	家形石棺、北西頭位

本人骨群の所属時期は、考古学的所見から、古墳時代中期～後期頃と推測されている。

* Takayuki MATSUSHITA

The Doigahama Site Anthropological Museum〔土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム〕



第1図 遺跡の位置 (1/25,000)

(Fig. 1 Location of the Hirosuwahara site, Kao Cho, Kumamoto Prefecture)

表2 年齢区分 (Table 2.Division of age)

	年齢区分	年 齢
未成人	乳児	1歳未満
	幼児	1歳～ 5歳（第一大臼歯萌出直前まで）
	小児	6歳～15歳（第一大臼歯萌出から第二大臼歯歯根完成まで）
	成年	16歳～20歳（蝶後頭軟骨結合癒合まで）
成人	壮年	21歳～39歳（40歳未満）
	熟年	40歳～59歳（60歳未満）
	老年	60歳以上

注）成年という用語については土井ヶ浜遺跡第14次発掘調査報告書（1996）を参照されたい。

所 見

1 号人骨（性別・年齢不明）

1 号石棺に先に埋葬された被葬者の人骨を 1 号人骨とした。保存状態はかなり悪く、骨粉状態になっているものが多く、人骨の特徴は定かではない。

I. 出土状況

頭を石棺の南東側に安置した仰臥伸展葬だったと考えられる。頭蓋は石棺の中央ではなく北側の側板に近い位置にあったが、頭蓋は大きくは移動されていないものと考えられる。大腿骨と脛骨が石棺の北東側から検出されたが、両骨ともにやはり北側の側板に寄せられていた。おそらく追葬時に 1 号人骨はやや北側に寄せられたものと思われる。1 号人骨の右側で側板に接して 1 振りの鉄刀が副葬されていた。

II. 人骨の形質

残存していたのは、頭蓋片、遊離歯、左右不明の大腿骨と脛骨である。頭蓋は小破片になっており、朱が付着していた。保存良好な遊離歯も残存していた。残存していた遊離歯は次のとおりである。

8	7	6	5	4	／	／	1	1	2	3	4	／	6	7	8
8	7	6	5	4	／	／	／	／	／	3	4	5	6	7	／

【●：歯槽閉鎖 ○：歯槽開存 ▼：先天の欠損 ■：未萌出 ／：不明、番号は歯種】

【1：中切歯、2：側切歯、3：犬歯、4：第一小臼歯、5：第二小臼歯、6：第一大臼歯、7：第二大臼歯、8：第三大臼歯】

咬耗度はBrocaの 1 ～ 2 度である。

四肢骨は右側の上腕骨と思われる骨体が残存していたが、著しく保存状態が悪く、取り上げることができなかった。また大腿骨と脛骨のそれぞれ骨体が残存していたが、これも保存状態が著しく悪く、左右の別も判別できなかった。観察したところ骨体の径はやや大きいようである。性別は、下肢骨の径がやや大きいことから、男性の可能性が強いが、確証を欠くので、一応性別不明としておきたい。また年齢も不明である。

2号人骨（男性・熟年）

I. 出土状況

頭を北西に置いた、追葬された被葬者の人骨である。1号人骨よりも保存状態はよい。埋葬姿勢は仰臥伸展葬である。頭蓋は後頭部を下にして、顔面が上方を向くような状態で検出されたが、この状態が本来の姿勢だったかは定かではない。頭蓋の下から第一頸椎が検出されたので、頭蓋の位置は動いていないと思われる。

II. 人骨の形質

残存していたのは、頭蓋、頸椎、左側の上腕骨、左右の大腿骨と脛骨が残存していた。頭蓋は後頭半分である。骨壁はやや厚く、後頭部の径は大きい。外後頭隆起の発達良好である。縫合は、矢状縫合とラムダ縫合の観察ができたが、両縫合とも内板は癒合している。また、右側側頭骨に直径約4mmの小孔が開いている。外板（頭蓋の外側面）の輪郭は粗いが、内板は鋭利である。自然に開いた小孔とは考えにくい。

下顎骨はよく残っていたが、形状を保って取り上げることはできなかった。下顎体の径はかなり大きく、歯も釘植していた。残存歯と歯槽の状態は次のとおりである。

／	7	6	5	4	3	2	1	／	1	2	3	4	／	6	7	／
／	7	6	5	④	3	2	1	／	1	2	3	4	5	⑥	7	⑧

〔●：歯槽閉鎖 ○：歯槽開存 ▼：先天的欠損 ■：未萌出 ／：不明、番号は歯種〕

〔1：中切歯、2：側切歯、3：犬歯、4：第一小臼歯、5：第二小臼歯、6：第一大臼歯、7：第二大臼歯、8：第三大臼歯〕

咬耗度はBrocaの2度である。なお、風習的抜歯の痕跡は認められない。また、歯の咬合形式は不明である。

頸椎は第一頸椎がほぼ完全に残っていたが、その他には2個の椎体が残存していたに過ぎない。左側の上腕骨が残存していた。保存状態はよくないが、骨体はやや扁平である。大腿骨は左右とも残存していたが、右側は工事中に蓋石が落下して、潰れてしまっている。粗線の発達は良好で、径も大きい、長さは短かったようである。脛骨も両側が残存していたが、大腿骨ほど状態がよくないので、詳細は不明である。

性別は、頭蓋や下顎骨および大腿骨の径が大きいことから、男性と推定した。年齢は、矢状縫合とラムダ縫合の内板が癒合していることから、熟年と推定した。

要 約

熊本県鹿本郡鹿央町大字広230番地にある広諏訪原遺跡の発掘調査が2004年（平成16年）2月におこなわれ、家形石棺から人骨が検出された。今回の調査では5基の石棺が調査されたが、人骨は1基の石棺（1号石棺）のみから検出された。人骨の保存状態は良好なものではなかったが、人類学的観察をおこない、以下の結果を得た。

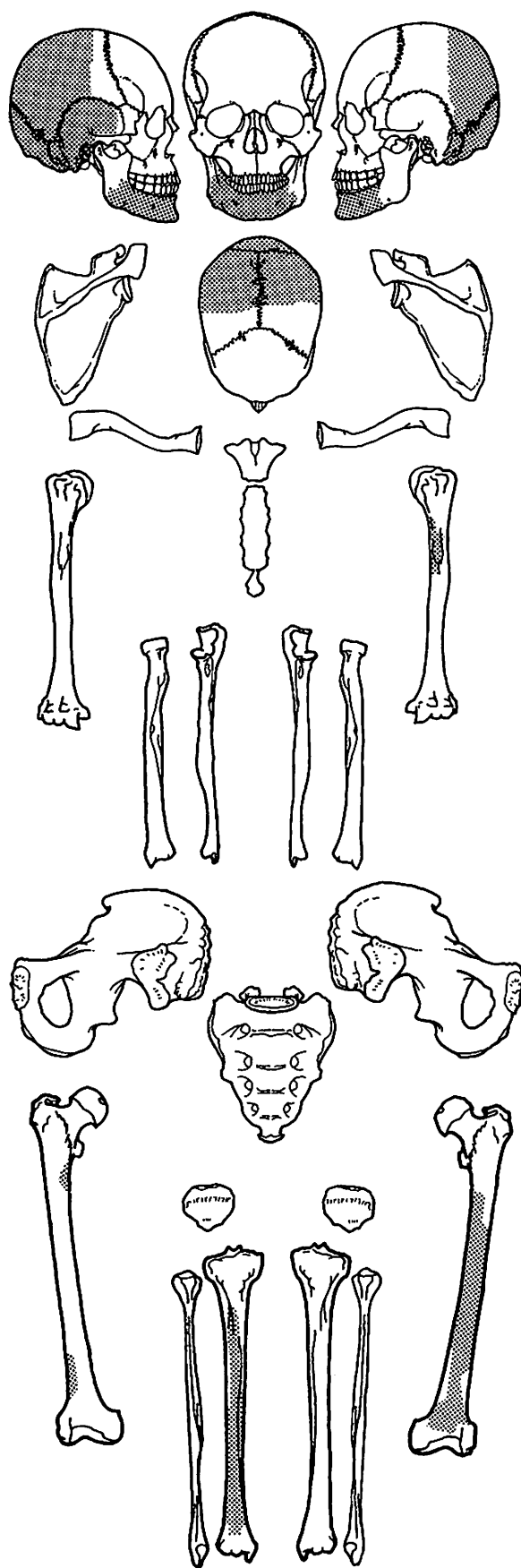
1. 1基の家形石棺から2体分の人骨が検出された。1体（2号人骨）は熟年の男性骨である。もう1体も成人骨であるが、性別と年齢は不明である。
2. この2体の人骨の所属時期は、古墳時代中期～後期頃と推測されている。
3. 2体とも埋葬姿勢は仰臥伸展葬と推測され、頭部をお互いに逆にして埋葬されていた。
4. 2体のうち1体は、下顎骨も大きく、下肢骨の径も大きく、頑丈であったが、長さは長くなさそうである。

謝 辞

擧筆するにあたり、本研究と発表の機会を与えていただいた熊本県鹿央町教育委員会の皆様方に感謝致します。

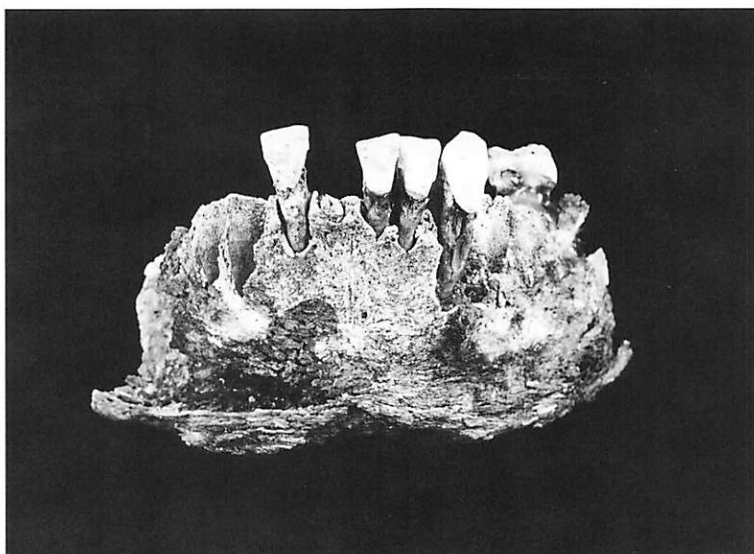
＜参考文献＞

1. Martin-Saller, 1957 : Lehrbuch der Anthropologie. Bd.1. Gustav Fisher Verlag, Stuttgart : 429-597.
2. 松下孝幸・他、1985a : 熊本県益城町福原横穴墓群出土の古墳時代人骨。福原横穴墓群（熊本県文化財調査報告第77集） : 29-42.
3. 松下孝幸、1985b : 玉名市小路石棺出土の古墳時代人骨。滑石小路箱式石棺・本堂山遺跡（玉名市文化財調査報告第6集） : 32-48, 57-61.
4. 松下孝幸・他、1985c : 熊本市古城横穴墓群出土の古墳時代人骨。古城横穴墓群（熊本県文化財調査報告第74集） : 129-146.
5. 松下孝幸・他、1986a : 熊本県鹿本町津袋大塚東側1号石棺出土の古墳時代人骨。津袋大塚東側1号石棺出土人骨研究報告書（鹿本町文化財調査研究報告第2集） : 5-33.
6. 松下孝幸・他、1986b : 熊本県山鹿市湯の口横穴群出土の古墳時代人骨。湯の口横穴群・菊池川中流域古墳・横穴群総合調査報告書（1）（山鹿市立博物館調査報告書第5集） : 111-122.
7. 松下孝幸・他、1988 : 熊本県山鹿市湯の口横穴群出土の古墳時代人骨。湯の口横穴群（Ⅱ）・菊池川中流域古墳・横穴群総合調査報告書（3）（山鹿市立博物館調査報告書第8集） : 53-63.
8. 松下孝幸・他、1989a : 熊本県七城町瀬戸口横穴墓出土の古墳時代人骨。北上原古墳・瀬戸口横穴墓群（熊本県文化財調査報告第104集） : 97-107.
9. 松下孝幸・他、1989b : 熊本県下益城郡中央町四十八塚5号墳出土の古墳時代人骨。堅志他城跡・四十八塚古墳（熊本県下益城郡中央町文化財調査報告第1集） : 77-114.
10. 松下孝幸・他、1989c : 熊本県山鹿市舞野遺跡出土の古墳時代人骨。銭亀塚古墳ほか（菊池川中流域古墳・横穴群総合調査報告書（4））（山鹿市立博物館調査報告書第9集） : 71-82.
11. 松下孝幸・他、1992 : 熊本県宇土市西潤野2号墳出土の古墳時代人骨。立岡古墳群（宇土市埋蔵文化財調査報告書第19集） : 71-84.
12. 松下孝幸、1997 : 熊本市五丁中原遺跡群第1次調査区3号墳周溝内墓壙出土の古墳時代人骨。五丁中原遺跡（五丁中原遺跡第1次調査区発掘調査概要報告書） : 25-26.
13. 松下孝幸、2004 : 「自然人類学」『環境考古学ハンドブック』 : 444-454. 朝倉書店
14. 分部哲秋・他、1991 : 熊本県菊池町灰塚古墳出土の人骨。灰塚古墳（県営畑地帯総合土地改良事業に伴う埋蔵文化財調査）（熊本県文化財調査報告第114集） : 49-59.

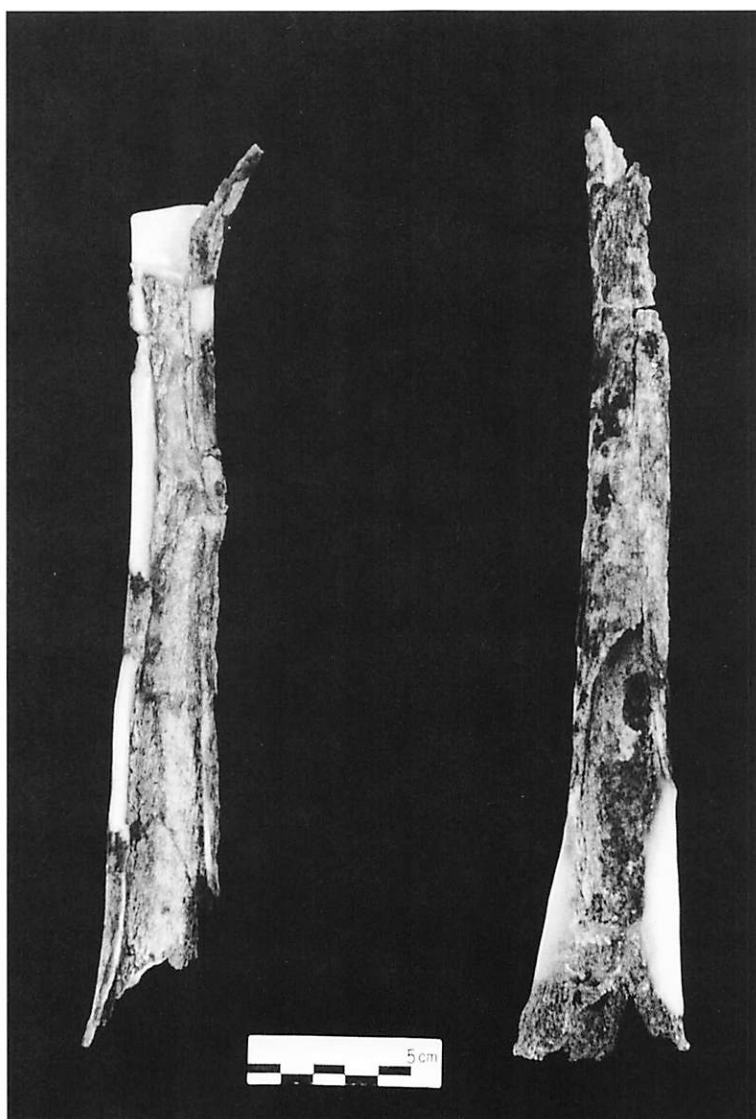


広諏訪原 2 号人骨（男性・熟年）
 (The Hirosuwahara 2, mature male)

第 2 図 人骨の残存部、アミかけ部分



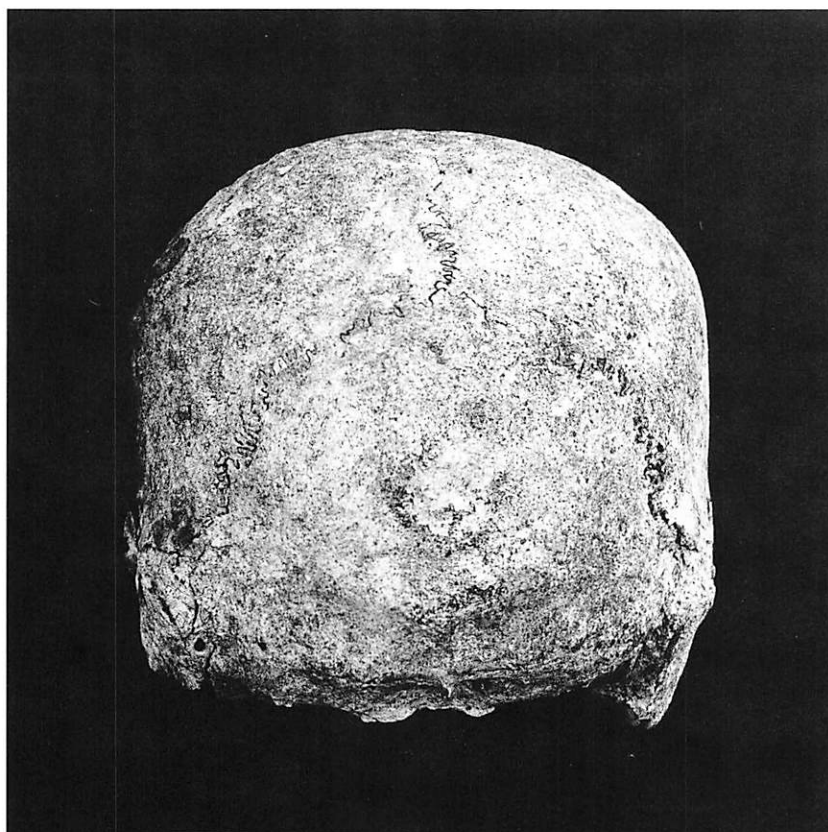
下顎骨正面 (Frontal view of the mandible)



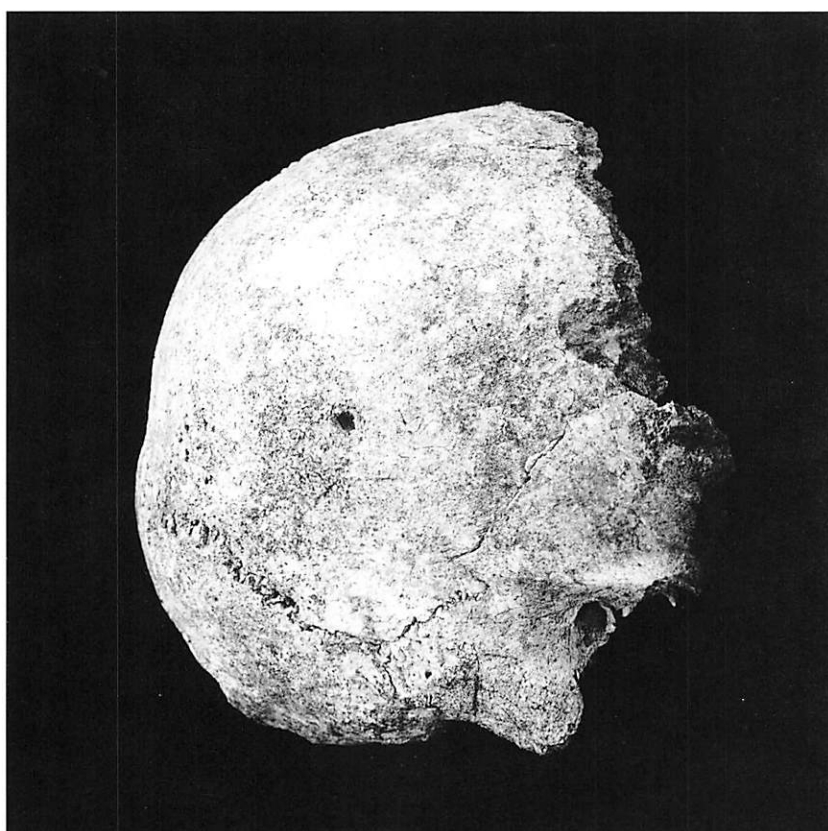
大腿骨 (Femur)

広諏訪原 2 号人骨 (男性・熟年)

(The Hirosuwahara 2, mature male)



頭蓋後面 (Rear view of the skull)



頭蓋側面 (Lateral view of the skull)

広諏訪原 2 号人骨 (男性・熟年)

(The Hirosuwahara 2, mature male)

付編 広諏訪原遺跡赤色顔料分析蛍光X線分析

藤 根 久 (パレオ・ラボ)

1. はじめに

広諏訪原遺跡の調査では、5世紀代の家形石棺や石棺系竪穴式石室が検出された。これら石棺には赤色顔料が付着し、また被葬者頭部付近あるいは埋土中に赤色塊が検出された。

ここでは、X線分析顕微鏡を用いて赤色顔料の成分分析を行った。

2. 試料と方法

試料は、1号石棺第一被葬者頭部および石棺付着、2号石棺付着および屍床面、3号石棺埋土中および石棺付着の各赤色顔料である（表1）。

初めに、試料のマイクロスコプ写真を撮影した後、最も赤味の強い部分を試料台に載せて、X線分析顕微鏡を用いて分析を行った。

測定は、(株)堀場製作所製XGT-5000TypeⅡを用いた。測定は、測定時間500sec、X線導管径100μm、電圧50KV、電流自動設定である。定量計算は、標準試料を用いないFP法（ファンダメンタルパラメータ法）で半定量分析を行った。

表1 赤色顔料分析を行った試料

試料No	遺 構	検出された位置
1	1号石棺	第一被葬者頭部
2	1号石棺	石棺付着
3	2号石棺	石棺付着
4	2号石棺	屍床面
5	3号石棺	埋土中
6	5号石棺	石棺付着

3. 結果および考察

X線分析顕微鏡（蛍光X線分析計）で測定した結果、いずれの赤色顔料も鉄を主体としたベンガラであった。

一般的に、赤色顔料は、辰砂（HgS）からなる朱、赤鉄鉱（Fe₂O₃）からなるベンガラ、鉛丹（Pb₃O₄）が知られている（たとえば、成瀬 2002）。

各試料について、特に赤味の強い部分について半定量分析を行った（表2）。その結果、全体的に鉄含有量が高く14.97～90.39%と高い。これらの鉄含有量は、土壌中の鉄含有量（通常4～5%）と比べても高いものである。このうち、Na1およびNa5の比較的純度の高いと思われる赤色塊は、特に高い含有量を示した。なお、試料Na5は鉄の強度が強いため明瞭ではないが、その他の試料はリンPやイオウSが特徴的に検出されている。

岡田（1997）は、漆器の赤色顔料の顕微鏡観察を行った結果、パイプ状ベンガラは珪藻を伴う場合があることから、水成環境下で生成されたことを指摘している。なお、試料Na1の赤色塊の一部を顕微鏡で観察したがパイプ状ベンガラは見られなかった。

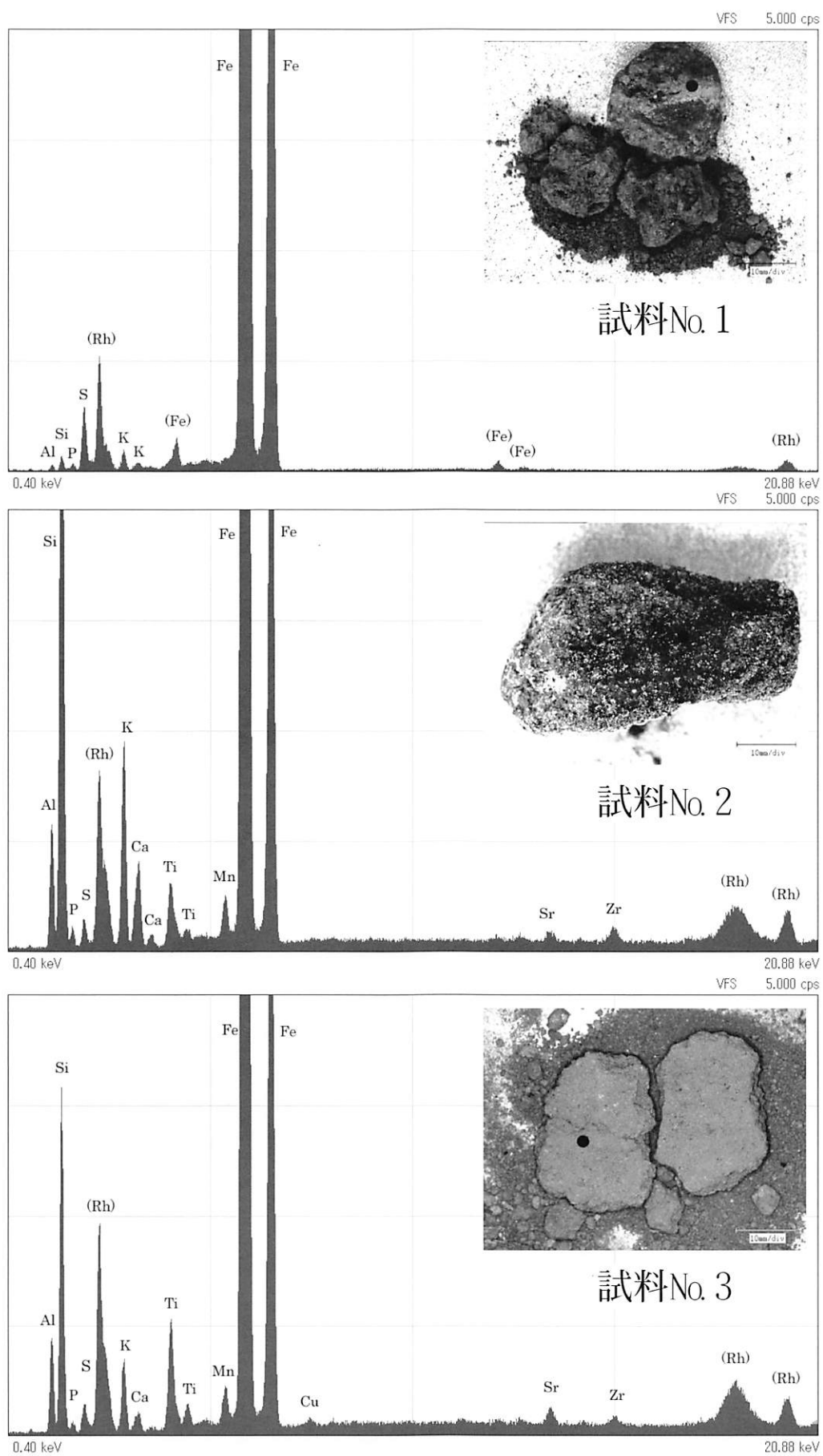
表 2 赤色顔料の半定量分析結果

試料No	MgO	Al ₂ O ₃	SiO ₂	P ₂ O ₅	SO ₃	K ₂ O	CaO	TiO ₂	MnO	Fe ₂ O ₃	Rb ₂ O	SrO	ZrO ₂	合計
1	0.11	3.22	3.35	0.70	3.41	0.53	0.11	0.03	0.00	88.48	0.05	0.01	0.00	100.00
2	0.00	17.08	59.37	0.97	0.77	3.08	1.02	0.46	0.17	16.99	0.01	0.02	0.04	99.98
3	0.00	24.72	42.59	0.50	1.12	1.63	0.33	1.47	0.24	27.24	0.02	0.08	0.06	100.00
4	0.52	19.11	40.46	2.35	4.56	1.03	1.42	1.35	0.09	29.05	0.00	0.02	0.04	100.00
5	0.00	3.08	5.60	0.09	0.36	0.28	0.06	0.08	0.00	90.39	0.04	0.01	0.00	99.99
6	0.00	18.47	58.67	0.93	0.87	3.66	1.13	1.00	0.16	14.97	0.03	0.03	0.08	100.00
最小値	0.00	3.08	3.35	0.09	0.36	0.28	0.06	0.03	0.00	14.97	0.00	0.01	0.00	
最大値	0.52	24.72	59.37	2.35	4.56	3.66	1.42	1.47	0.24	90.39	0.05	0.08	0.08	

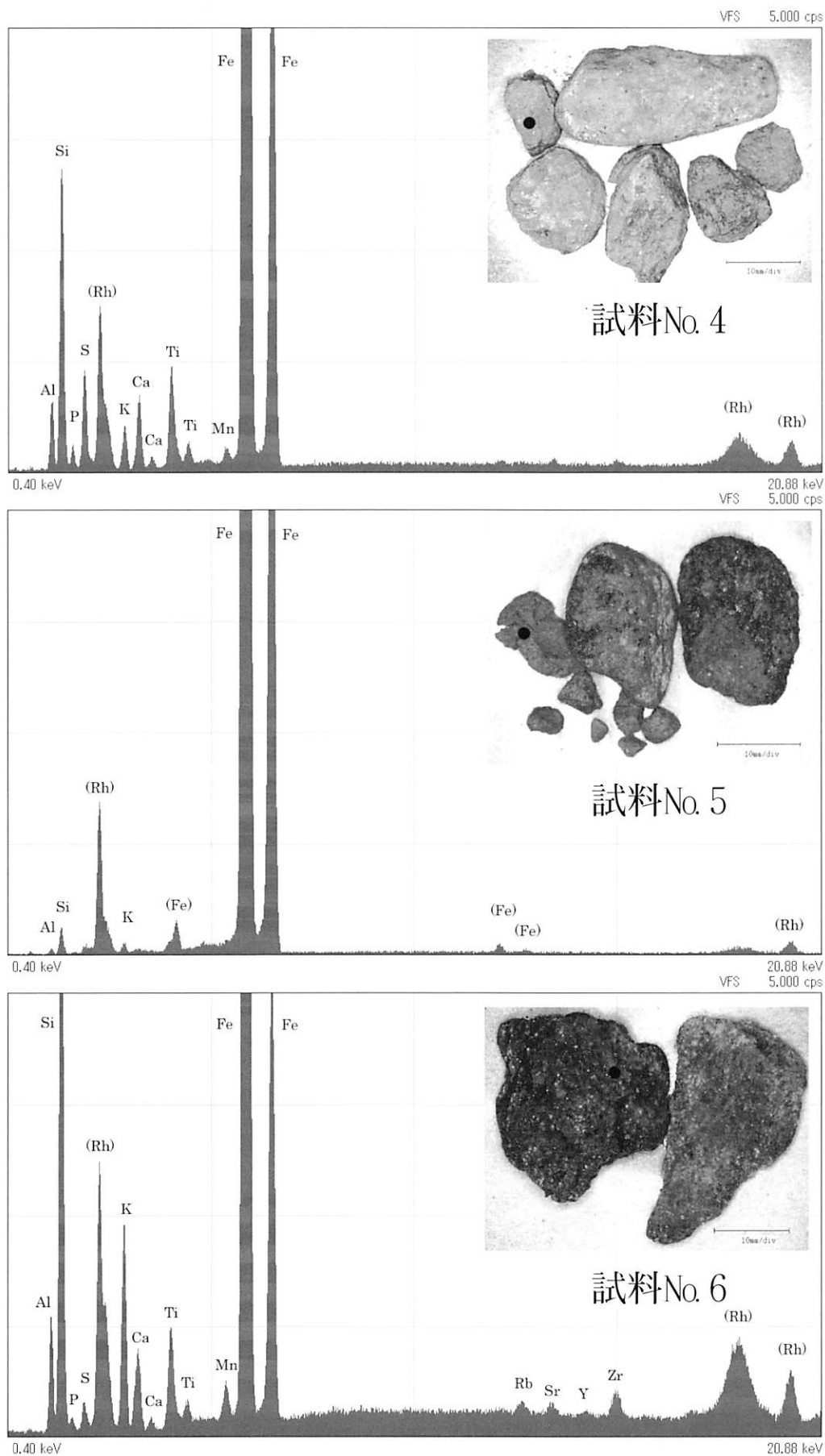
引用文献

成瀬正和（2002）日本の美術 2 「No439正倉院宝物の素材」．至文堂、98p.

岡田文男（1997）パイプ状ベンガラ粒子の復元．日本文化財科学会第14回大会研究発表要旨集、p38-39.



第 1 図 No. 1 ～ No. 3 の赤色顔料の蛍光 X 線スペクトルと測定位置（黒丸）



第 2 図 No. 4 ～ No. 6 の赤色顔料の蛍光 X 線スペクトルと測定位置（黒丸）

写真図版

図版 1



I 区調査区全景



II 区調査区遠景（北より）

図版 2



1号石棺検出状況①（南より）



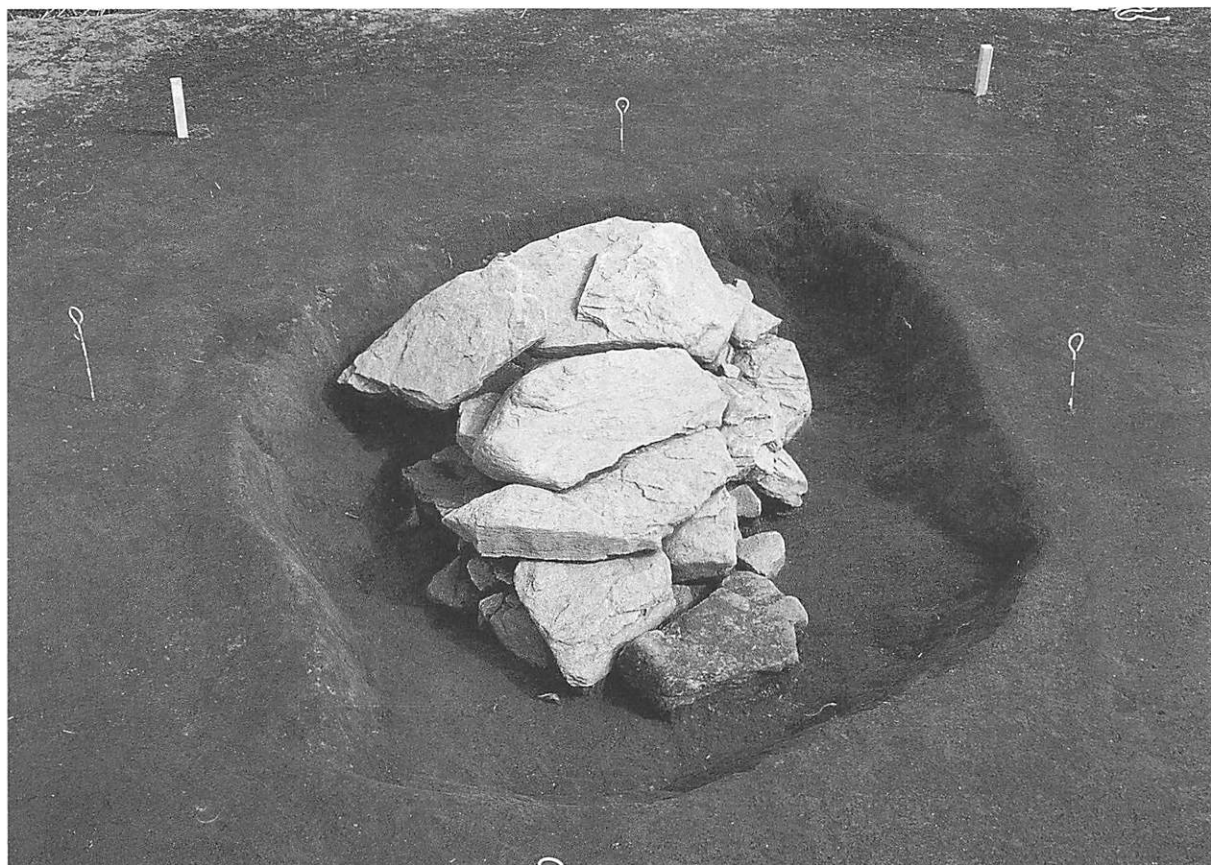
1号石棺検出状況①（西より）



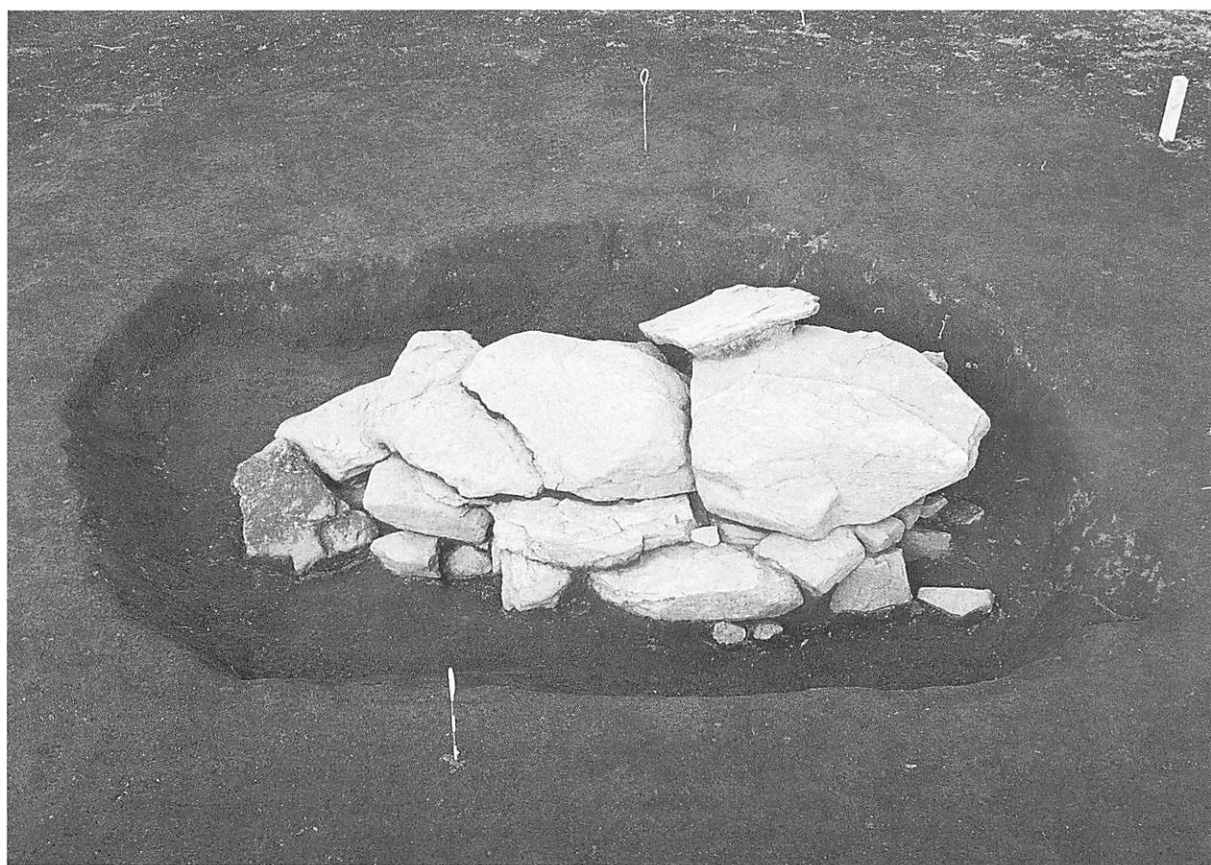
1号石棺検出状況②（南より）



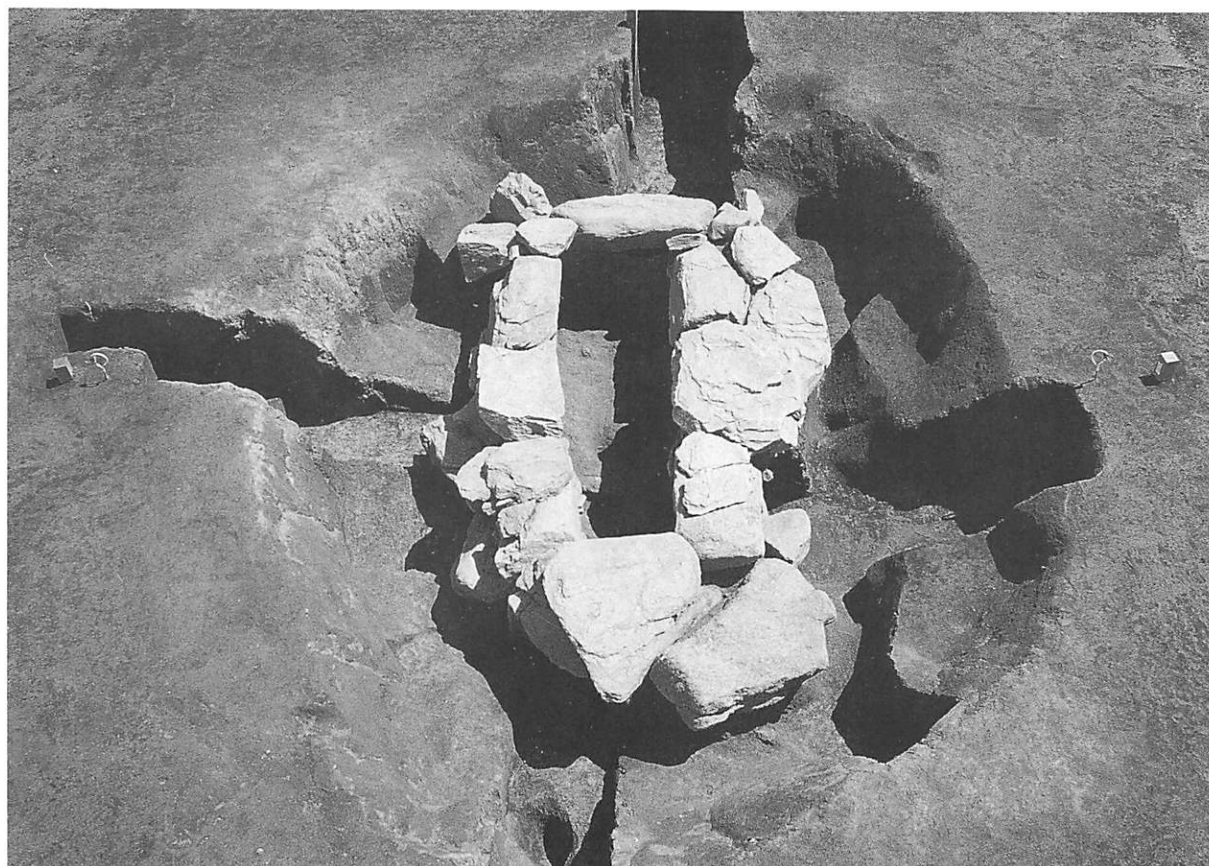
1号石棺検出状況②（西より）



2号石棺検出状況①（西より）



2号石棺検出状況①（南より）



2号石棺検出状況②（西より）



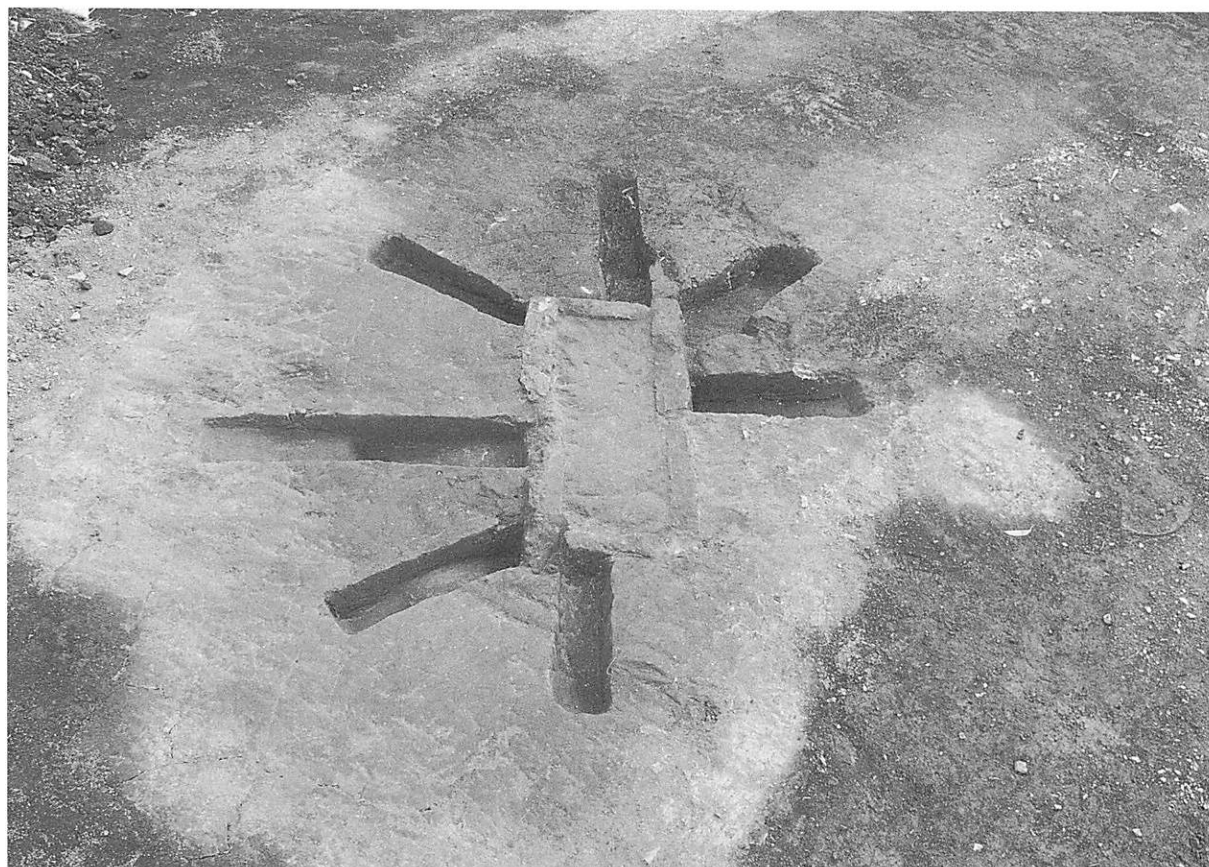
2号石棺検出状況②（北より）



3号石棺検出状況（東より）



3号石棺完掘状況（西より）



4号石棺検出状況（西より）



4号石棺完掘状況（西より）



5号石棺検出状況（西より）



5号石棺完掘状況（西より）



4号沟



5号沟



6号沟

図版10



Fe-3.5 出土状況



Fe-1 出土状況



Fe-6 出土状況



I 区作業風景



1号土壇検出状況



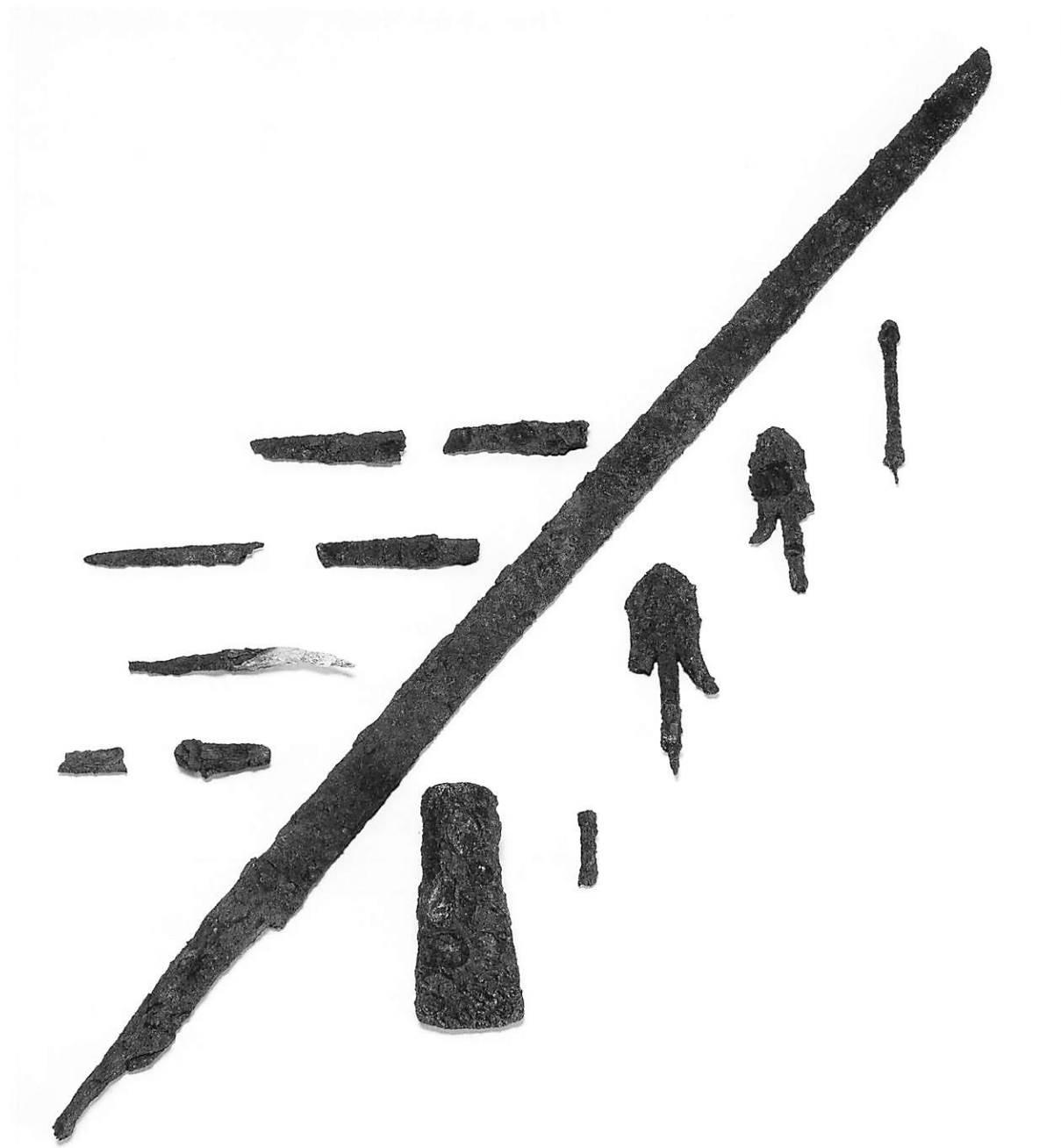
Fe-7 出土状況



Fe-11 出土状況



II 区作業風景



広諏訪原遺跡出土遺物

報告書抄録

ふりがな	ひろすわばるいせき					
書名	広諏訪原遺跡					
副書名	町民テニスコート新設工事及び農村総合整備事業農道7号工事に伴う埋蔵文化財調査報告書					
巻次						
シリーズ名	鹿央町文化財調査報告書					
シリーズ号						
編著者名	村田 勉					
編集機関	鹿央町教育委員会					
所在地	〒861-0564 熊本県鹿本郡鹿央町大字広230 TEL.0968-36-2183 FAX.0968-36-3622					
発行年月日	2004年12月10日					
所収遺跡名	所在地	北緯	東経	調査期間	調査面積	所収遺跡名
広諏訪原遺跡Ⅰ区	熊本県 鹿本郡 鹿央町 広	32° 58' 22"	130° 41' 4"	20040121 ～ 20040331	700㎡	テニスコート 新設工事に伴う
広諏訪原遺跡Ⅱ区	熊本県 鹿本郡 鹿央町 広	32° 58' 16"	130° 41' 10"	20040226 ～ 20040305	400㎡	農道工事に伴う

所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物
広諏訪原遺跡Ⅰ区	その他の墓	古墳時代中期	家形石棺 石棺系竪穴式石室	鉄刀・鉄斧・鉄鏃・刀子・ 人骨・土師器
広諏訪原遺跡Ⅱ区	その他の墓	古墳時代中期	家形石棺	刀子・鉄製釧

鹿央町文化財調査報告書

広 諏 訪 原 遺 跡

平成16年12月10日

編集・発行 鹿央町教育委員会

〒861-8604 熊本県鹿本郡鹿央町大字広230

TEL.0968-36-2183

印刷 株式会社 トライ

〒861-0105 熊本県鹿本郡植木町味取373-1

文化財調査報告の電子書籍の末尾に挿入する奥付

この電子書籍は、『鹿央町文化財調査報告書 広諏訪原遺跡』を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会と図書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

なお、平成 17 年(2005)に山鹿市、鹿北町、菊鹿町、鹿本町、鹿央町が合併し山鹿市となりました。調査記録及び出土遺物は、山鹿市教育委員会が保管しています。

書名：鹿央町文化財調査報告書 広諏訪原遺跡

発行：山鹿市教育委員会

〒861-0592 熊本県山鹿市山鹿 987 番 3

電話：0968-43-1651

URL：<https://www.city.yamaga.kumamoto.jp/>

電子書籍制作日：2025 年 7 月 9 日